井尻B遺跡2

——第3次調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第411集

1995

福岡市教育委員会

I Jiri

井尻B遺跡 2

——第3次調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第411集

遺跡略号 IZB-3
調査番号 9201

1995

福岡市教育委員会

(1) 軒丸瓦出土状況 (2) 出土軒丸瓦

(1) 住居跡群
(2) 溝25

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、南区井尻B遺跡内の共同住宅建設に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果弥生時代から奈良時代にわたる遺構、遺物が見つかりました。とくに奈良時代の古瓦が大量に出土し、井尻付近に未知の寺院があったのではないかと考えられる成果を得ることができました。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた株式会社都市総合開発研究所を始めとする多くの方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は共同住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1992年４月６日～７月16日にかけて行なった井尻Ｂ遺跡第３次調査の報告書である。

2．検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Ｍを付して検出順に通し番号を付した。本書では、この番号からＭを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡１、溝２のように記述する。

3．本書で使用する方位は磁北である。

4．本書で使用した遺構実測図は宮井善朗が作成した。製図は宮井の他熊埜御堂和香子、林由紀子の協力を得た。

5．本書で使用した遺物の実測図は宮井の他熊埜御堂和香子が作成した。また製図は宮井、熊埜御堂の他林由紀子の協力を得た。また出土旧石器の実測、製図は池崎譲二氏の協力によるものである。

6．本書使用の写真は宮井が撮影したものである。

7．遺物実測図の括弧内の番号は収蔵時の登録番号である。

8．本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。

9．本書の執筆、編集は宮井が行なった。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査の経緯 …… 1
　2．調査体制 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　1．概要 …… 5
　2．住居跡 …… 5
　(1) 弥生時代、古墳時代の住居跡 …… 5
　(2) 古代の住居跡 …… 22
　3．井戸、土壙 …… 22
　4．溝 …… 33
　5．出土瓦について …… 33
　6．その他の遺構出土の土器 …… 51
　7．出土石器、鉄器、玉類 …… 52
Ⅳ．まとめ …… 56

挿図目次

Fig. 1　井尻B遺跡周辺の遺跡（1：25000） …… 3
Fig. 2　調査地点（現在　1：4000） …… 4
Fig. 3　調査地点（昭和初年　1：4000） …… 4
Fig. 4　住居跡4、7実測図（1：60） …… 6
Fig. 5　住居跡11、12実測図（1：60） …… 7
Fig. 6　住居跡4、7、11、12、14出土土器実測図（1：4） …… 9
Fig. 7　住居跡14実測図（1：60） …… 10
Fig. 8　住居跡18、19実測図（1：60） …… 11
Fig. 9　住居跡18出土土器実測図（1：4） …… 12
Fig. 10　住居跡20、21実測図（1：60） …… 13
Fig. 11　住居跡20出土土器実測図（1：8、1：4） …… 14
Fig. 12　住居跡22実測図（1：60） …… 15
Fig. 13　住居跡22出土土器実測図(1)（1：4） …… 16
Fig. 14　住居跡22出土土器実測図(2)（1：4） …… 17
Fig. 15　住居跡26実測図（1：60） …… 18
Fig. 16　住居跡26出土土器実測図(1)（1：4） …… 18
Fig. 17　住居跡26出土土器実測図(2)（1：4） …… 20
Fig. 18　住居跡29、31、36、37実測図（1：60） …… 21
Fig. 19　住居跡2、8実測図（1：60） …… 23
Fig. 20　住居跡29、37、2、8、36出土土器実測図（1：4） …… 24
Fig. 21　井戸33、土壙1、34、35実測図（1：40） …… 25
Fig. 22　井戸33、41出土土器実測図（1：4） …… 26
Fig. 23　井戸40、41実測図（1：40） …… 27
Fig. 24　井戸40出土土器実測図(1)（1：4） …… 28
Fig. 25　井戸40出土土器実測図(2)（1：4） …… 29
Fig. 26　土壙6実測図（1：40）、ピット27、118実測図（1：20） …… 31
Fig. 27　土壙1、6、34、ピット27、118出土土器実測図（1：4） …… 32
Fig. 28　溝25実測図（1：80） …… 34
Fig. 29　溝25出土土器実測図（1：4） …… 35
Fig. 30　軒丸瓦実測図（1：4） …… 36
Fig. 31　軒平瓦実測図（1：4） …… 37

Fig. 32　平瓦実測図(1)（1：4）……38
Fig. 33　平瓦実測図(2)（1：4）……39
Fig. 34　平瓦実測図(3)（1：4）……40
Fig. 35　平瓦実測図(4)（1：4）……41
Fig. 36　平瓦実測図(5)（1：4）……42
Fig. 37　平瓦実測図(6)（1：4）……43
Fig. 38　平瓦実測図(7)（1：4）……44
Fig. 39　平瓦実測図(8)（1：4）……45
Fig. 40　平瓦実測図(9)（1：4）……46
Fig. 41　丸瓦実測図(1)（1：4）……47
Fig. 42　丸瓦実測図(2)（1：4）……48
Fig. 43　丸瓦実測図(3)（1：4）……49
Fig. 44　丸瓦実測図(4)（1：4）……50
Fig. 45　その他の遺構出土土器実測図（1：4）……52
Fig. 46　各遺構出土石器実測図(1)（1：2、1：4）……53
Fig. 47　各遺構出土石器実測図(2)、鉄器、玉類実測図（1：2）……54
Fig. 48　調査区北壁土層図（1：80）……57
Fig. 49　井尻廃寺の推定寺域……58

図　版　目　次

PL. 1　(1) 調査区全景（西半区　東から）
(2) 調査区全景（東半区　西から）
PL. 2　(1) 住居跡群（南から）
(2) 住居跡4（東から）
PL. 3　(1) 住居跡7（東から）
(2) 住居跡12（南から）
PL. 4　(1) 住居跡14（東から）
(2) 住居跡11、21、1号掘立柱建物（南から）
PL. 5　(1) 住居跡20（南から）
(2) 住居跡20遺物出土状況
PL. 6　(1) 住居跡22（南から）
(2) 住居跡17、26（南から）
PL. 7　(1) 住居跡26遺物出土状況
(2) 住居跡29（北から）
PL. 8　(1) 住居跡36（南から）
(2) 住居跡8（東から）
PL. 9　(1) 住居跡2（北から）
(2) 住居跡2瓦組遺構（北から）
PL. 10　(1) 井戸40（西から）
(2) 井戸41（西から）
PL. 11　(1) 井戸33（南から）
(2) 土壙6（南から）
PL. 12　(1) 溝25（南から）
(2) 溝25遺物出土状況(1)（東から）
PL. 13　(1) 溝25遺物出土状況(2)（東から）
(2) 2号掘立柱建物（西から）
PL. 14　(1) ピット27（東から）
(2) ピット118（南から）
PL. 15　出土遺物(1)
PL. 16　出土遺物(2)

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

1991年8月22日付けで、株式会社都市総合開発研究所より、共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は井尻B遺跡内に位置しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて9月4日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構、遺物が良好に残っていることが判明した。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、株式会社都市総合開発研究所との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1992年4月6日に着手し、7月16日に終了した。

2．調査体制

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　井口雄哉（前）　尾花　剛（現）
調査総括　埋蔵文化財課　課長　折尾学　第2係長　塩屋勝利（前）　山崎純男（現）
調査庶務　埋蔵文化財課第1係　吉田麻由美
調査担当　埋蔵文化財課第2係　宮井善朗
調査作業　中川敏男　広田熊雄　野中辰雄　藤野保夫　吉住作美　熊本交伸　上野龍雄　大長正弘　別府俊美　松井一美　徳永静雄　永松伊都子　石川洋子　野口ミヨ　森山キヨ子　岩瀬恵美子　西本スミ　篠塚ひろ子　澄川アキヨ　武田潤子　中村フミ子　脇坂喜代子　日比野典子　藤野信子
整理作業　熊埜御堂和香子　石津玲子　田中依里　竹田千代　大石加代子　林由紀子　小森佐和子　土斐崎つや子　堂園晴美　太田順子　丸井優子

また調査時には株式会社都市総合開発研究所、高木工務店、重岡工務店には多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

なお調査、整理に当たって、西谷正先生（九州大学）、山崎信二氏（奈良国立文化財研究所）をはじめ、九州歴史資料館、太宰府市教育委員会の方々から多くの教示をいただいた。また福岡市教育委員会の佐藤一郎氏、吉留秀敏氏、瀧本正志氏をはじめとする同僚諸氏からも多くの助言をいただいた。深く感謝すると共に、本報告書に十分活かしきれなかったことをお詫びしたい。

遺跡調査番号	9201		遺跡略号	IZB-3	
調査地地番	福岡市南区井尻1丁目293—1、2、294—2				
開発面積	1765㎡	調査対象面積	966㎡	調査面積	1060.5㎡
調査期間	1992年4月6日～7月16日		分布地図番号	25-A-3	

Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境

井尻Ｂ遺跡は福岡平野のほぼ中央部に位置する。福岡平野には那珂川、御笠川の二本の川が貫流する。両河川の間には須玖丘陵とそれから北側に派生して来る台地群が北側へ伸びている。台地内には、小規模な谷が多く入り込み複雑な地形をなしている。この台地上や、沖積地内の微高地に拠って各時代の遺跡が残っている。井尻Ｂ遺跡は須玖丘陵が北に伸びつつ標高を下げ、やや低平な台地となる境界付近に立地する。遺構検出面である地山は鳥栖ロームであるが、比恵遺跡、那珂遺跡などで見られるものほど粘土化していない。

まず井尻遺跡群内における既往の調査について簡単に触れておく。1次調査は今回調査のすぐ東側、南区井尻１丁目111―1他において行われた。溝状遺構や、水溜状遺構、土壙などが検出されているが、集落の縁辺に近い位置と考えられる。包含層からは瓦も出土しており、今回調査と同様の格子、斜格子叩きの平瓦と模骨痕の残る丸瓦である。2次調査は井尻５丁目175―1において行われた。今回調査区から南へ300ｍの位置にある。豊富な遺構、遺物が出土している。主な遺構は弥生時代後期の竪穴式住居、石蓋土壙墓、溝など、古墳時代では井尻Ｂ１号墳と名付けられた古墳の周溝が検出され、溝内から多量の埴輪片と共に初期須恵器が出土している。また古代の竪穴式住居も検出されている。この他新期ロームから多量の旧石器が見つかっており、細石刃文化期のものを主とし、ナイフ形石器文化期のものを数点含むという。4次調査は井尻１丁目747―1で行われ、弥生時代後期の竪穴式住居跡などが検出されている。

つぎに今回調査で主に見られた弥生時代と古代について周辺の遺跡を概観しておこう。弥生時代については井尻Ｂ遺跡から南へ約１kmの地点にある須玖遺跡群を抜きにしては語れない。須玖遺跡群は弥生時代の奴国の中心地である。須玖丘陵の先端付近からその前面に広がる沖積地にかけて奴国王墓であるＤ地点、墳丘墓をはじめとする甕棺墓群、青銅器やガラスの工房跡等が見つかっている。これらについては既に多くの研究で触れられており、近年では春日市による概説もある（「須玖岡本遺跡」吉川弘文館1994）のでここでは省略する。この他台地上の遺跡としては比恵遺跡、那珂遺跡などが重要である。いずれも弥生時代全期間にわたって営まれる拠点集落である。また沖積地内の微高地による集落として雀居遺跡が挙げられる。弥生時代の後期の大集落で、環濠を巡らせ、大形の掘立柱建物を含む掘立柱建物群からなる。多量の木製品にも注目される。このような沖積地内の集落は最近の試掘調査などで新たに見つかるものが多く、この他にも後漢鏡が出土した東那珂遺跡などもある。今後も注意が必要である。

古代遺跡については大宰府がとくに重要であるが、既に諸書に詳しいので省略する。大宰府には多くの附属施設があり、中央区平和台にある鴻臚館はその一つである。外交と交易の窓口として、多量の中国陶磁をはじめとする遺構、遺物が見つかっている。大宰府から鴻臚館に至る道も、太宰府市佐野遺跡、九州大学春日原キャンパス内遺跡などで見つかっている。寺院跡では南区三宅廃寺があげられる。出土した瓦は老司式であるが、格子目叩きの平瓦、竹状模骨をもつ丸瓦があり、井尻Ｂ遺跡に共通する点もある。集落跡としては、掘立柱建物群からなる井相田Ｃ遺跡、竪穴式住居を中心とする南八幡遺跡、麦野Ａ遺跡、麦野Ｃ遺跡、雑餉隈遺跡などがある。いずれも存続期間は短いようである。1994年度に調査された雑餉隈遺跡５次調査では50基もの住居跡が出土したが、明らかな建て替えと考えられるもの以外はほとんど切り合いが見られなかった。奈良時代初頭頃に突如として大集落が出現し、短期間で廃絶される背景に大宰府造営にかかわる政治的な集住を考えるのは穿ち過ぎであろうか。

1．井尻Ｂ遺跡　2．比恵遺跡　3．那珂遺跡　4．東那珂遺跡　5．雀居遺跡　6．那珂君休遺跡　7．諸岡Ａ遺跡
8．諸岡Ｂ遺跡　9．板付遺跡　10．高畑遺跡　11．笹原遺跡　12．三筑遺跡　13．井相田Ｃ遺跡　14．麦野Ａ遺跡
15．麦野Ｂ遺跡　16．麦野Ｃ遺跡　17．南八幡遺跡　18．雑餉隈遺跡　19．横手遺跡　20．寺島遺跡　21．井尻Ａ遺跡
22．須玖遺跡群（唐梨、永田、坂本、五反田など）

Fig. 1　井尻Ｂ遺跡周辺の遺跡（1：25000）

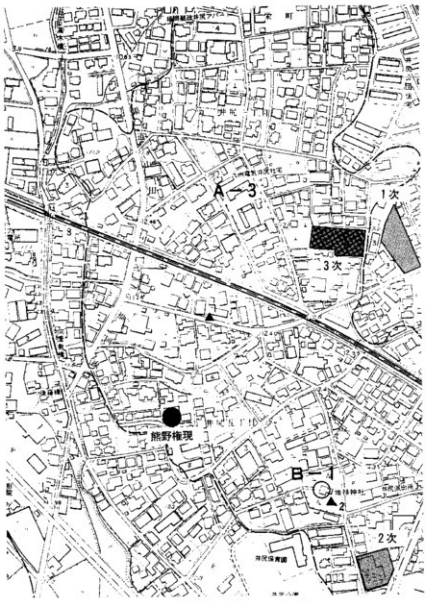


Fig. 2　調査地点（現在　1：4000）

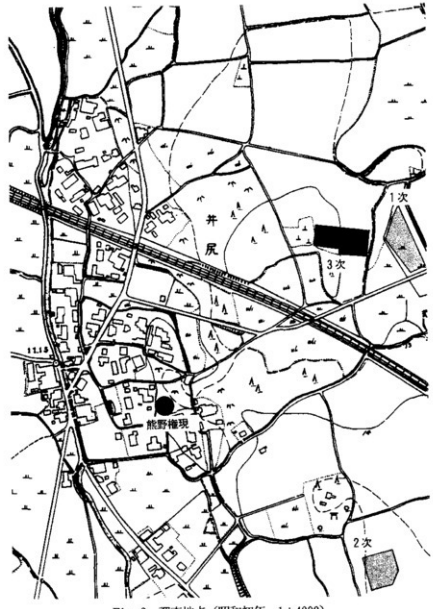


Fig. 3　調査地点（昭和初年　1：4000）

Ⅲ. 調 査 の 記 録

1．概要

井尻Ｂ遺跡で検出した主な遺構は、住居跡、井戸、土壙、掘立柱建物、溝などがある。このうち住居跡は弥生時代後期から古墳時代前期初頭を中心とし、古代の住居も２基ある。また古期の瓦を多量に含む南北溝を検出した。機能に興味が持たれるが、決め手になる資料は出土していない。

2．住居跡

(1) 弥生時代～古墳時代の住居跡

弥生時代から古墳時代と考えられる住居跡は全部で18基検出した。内円形住居が１基と、残りは長方形の住居である。時期は、円形住居と判断した住居跡５が、伴う土壙の可能性がある土壙の遺物によって、中期に属し、他の長方形住居跡は、弥生時代後期前半から、古墳時代前期前半に及んでいる。以下の報告では、調査区ほぼ中央を南北にはしる古代溝25を境に、西側の住居跡の密集する地区を西区、東側を東区と呼称する。

住居跡４（Fig. 4） 西区の東端で検出した。東側を削平されているが、長方形の住居と考えられる。長辺4.7m、短辺3.5mほどに復元できよう。断面図に示した柱穴を主柱穴と判断し、２本柱と考えたが、やや中軸からはずれている。部分的にも壁溝も残存している。住居中央の床に火を受けた部分があるが、掘り込みは見られない。壁際にも焼土が見られる。出土遺物に乏しいが、形態と２本柱であることから弥生時代後期頃と思われるが、他の例と比べて、ベッド状遺構が痕跡すら見られず、主柱穴の同定に疑問が生じれば、出土遺物が示す古代まで下がる可能性もある。住居跡４の北側にも段状の落ちこみが見られ、これを住居の壁の一部と考えた。これを**住居跡３**とする。床面から平底の底部が出土している。

出土土器（Fig. 6） 遺存の悪い住居跡なので、時期を確定できる遺物に乏しい。１は甕の口縁部である。磨滅のため調整がよくわからないが、口縁の外反度から見て古代のものと考えられる。復元口径18cmを測る。２は甕の底部であろう。安定に欠ける平底から、内湾しながら立ち上がる。弥生時代後期のものである。

住居跡７（Fig. 4） 西区の中央付近、住居跡３、４の北側で検出した。遺存はよくない。土壙６に切られる。長方形を呈し、長辺4.5m、短辺3.3mを測る。東辺から南辺にかけてＬ字状にベッド状遺構をめぐらせる。ベッドは盛り土によって築かれる。南辺の中軸から東側へ1.3mほどベッドを切り、長方形の土壙を掘り込む。入口と考えられる。東辺のベッドの中央直下にあるピットが主柱穴の１つと考えられ、２本柱であろう。

出土土器（Fig. 6） 3～10が住居跡７の出土遺物である。ほとんど床面出土である。３は直口壷である。口縁は直立し、肩は余り張らない。外面と口縁内面にハケメを施す。胴部内面はナデを施す。復元口径10.2cmを測る。4～8は高坏である。４は外面をヘラ状工具でなで付ける。内面には絞り痕がある。５は８と同様な外来系の高坏であろう。６はやや長い脚部を持つもので、在地系と考えられる。７は明瞭な屈曲部を持ち、坏部上半が強く外反する畿内系の高坏である。裾部も屈曲して開く。８も畿内系の高坏脚部。裾部は強く開き、穿孔する。外面はヘラナデされる。９は単口縁の鉢である。底部はおそらく丸底であろう。復元口径15cmを測る。10は甕底部である。凹凸の多い平底である。外面は粗いハケメを施す。3、4、5、10は覆土出土であるが、大きな時期差は無くほぼ古墳時代初頭に位置付けられる土器群である。

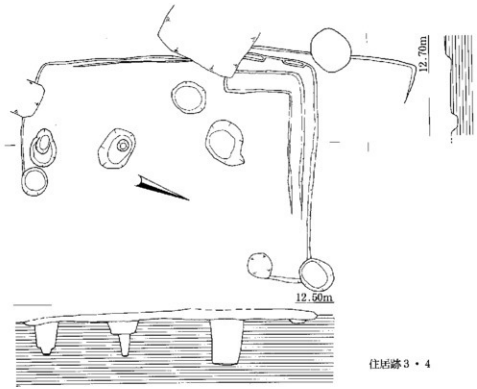


Fig. 4 住居跡4、7実測図（1：60）

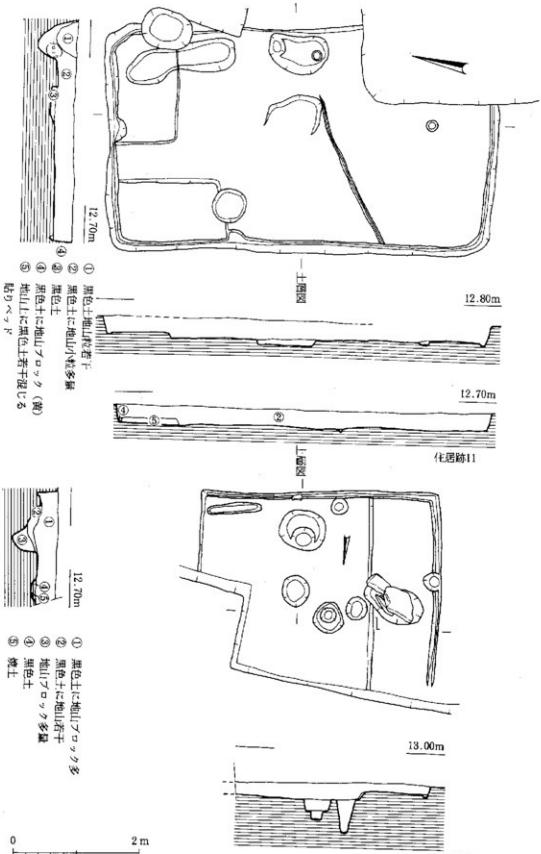


Fig. 5 住居跡11、12実測図（1：60）

住居跡11（Fig. 5） 調査区の西端で検出した。住居跡21、26に切られる。長方形を呈し、長辺６ｍ、短辺3.7ｍを測る。北辺の東半分と、西辺の北から1.8ｍほどの範囲に幅１ｍほどのベッド状遺構を、盛土によって築く。東辺の中央壁際に楕円形の土壙を持つ。入口と考えられる。北、東、南の三辺には壁溝がめぐるが、入口のある東側には見られない。住居跡床面にはピットがほとんど見られず、主柱穴は不明である。床面中央に浅い凹みが見られ、炉跡の可能性があるが、焼土、炭などは見られない。

出土土器（Fig. 6） 11～16が住居跡11の出土土器である。11は小形の鉢である。口縁は単口縁で、底部付近でわずかに外反する。底部は安定感のある平底である。口径14cm、器高7.3cmを測る。12は器台の脚部である。やや裾広がりになり、外面にハケメを施す。裾部径15cmほどを測る。13は無頸壺の口縁部である。口縁は折り返しており、内外面とも丹塗研磨される。端部は甘く面取りされる。14は甕の底部である。外面にハケメを施す厚い平底である。径７cmほどを測る。15は甕の底部であろう。平底で立上がりでごくわずかに外反する。外面はハケメを施す。16は壺底部と思われる。底面は剝離しており、脚台があった可能性もある。外面はハケメを施す。これらの土器から、14の中期前半の甕は混入と考えられる。他の土器については、後期前半までに収まるものと考えられる。

住居跡12（Fig. 5） 西区北端で検出した。北側が調査区外にでる。方形に近い平面形と考えられる。東西４ｍを測る。南北は、断面図に示したピットのうちベッド直下のものを主柱穴の一つとして復元すると3.8ｍほどになる。東辺のベッド状遺構は、地山削り出しである。東、南辺には壁溝がめぐる。２本柱であろう。

出土土器（Fig. 6） 17、18が住居跡12の出土土器である。17は甕である。口縁はわずかに外反しつつ開き、端部は丸くおさめる。屈曲は甘く、内面には鈍い稜が立つ。肩は余り張らない。口径18cmを測る。19は複合口縁壺である。口縁部は屈曲部より上部が直線的に内傾する。頸部は外反しながら開く。17の甕は後期後半以降である。複合口縁壺はやや古い形態とも見えるが、井尻遺跡の北側に位置する比恵、那珂遺跡群では複合口縁壺は後期のかなり終末に近い時期まで内傾する口縁を持つことが知られてきているので、甕との時期的齟齬は無いものと考えられる。

住居跡14（Fig. 7） 調査区西端で検出した。東端部分が調査区内にかかるのみである。南北4.2ｍほどに復元できよう。南辺の調査区境界付近にわずかに段落ちが確認できるので、幅1.1ｍほどのベッド状遺構を持つと考えられる。この住居跡で特徴的なのは、床面（ベッド）一面に炭化米の散布が見られたことである。厚い箇所では堆積が10cmにも及んでいる。遺存のよいものだけを採集したが、4.7ℓ入りのプラスチックケースほぼ二箱に及ぶ。床の一部も焼けており、住居内に保存してあったものが、火災に遭ったものであろうか。

出土土器（Fig. 6） 19～21が住居跡14出土土器である。19は甕である。口縁は直線的に大きく開き、端部は丸くおさめる。胴部外面に縦方向のハケメ、口縁部内面には横方向のハケメを施す。20は丸底の椀である。内外面とも雑なハケメを施している。内面ハケメの後ナデ消しているようである。口径18cm、器高7.8cmを測る。21は手づくね土器である。鉢型を呈する。ユビオサエによって凹凸が著しい。これらの土器から、弥生時代後期後半～終末の幅で考えておくことができよう。

住居跡18（Fig. 8） 調査区北西隅で検出した。住居跡19を切り、住居跡26に切られる。長方形に復元でき、長辺６ｍ、短辺4.3ｍを測る。両短辺側に幅１ｍほどのベッド状遺構が見られる。東側は全面にあったかどうかは不明である。ベッドは地山削り出しであるが、東側ベッド中央部の幅70cmほどはベッドが切れており、地山土の埋め戻しによってつないでいる。壁溝が本来全周巡っていたものと考えられる。主柱穴は２本である。南壁の中央に、入口と考えられる楕円形の土壙が掘り込まれている。

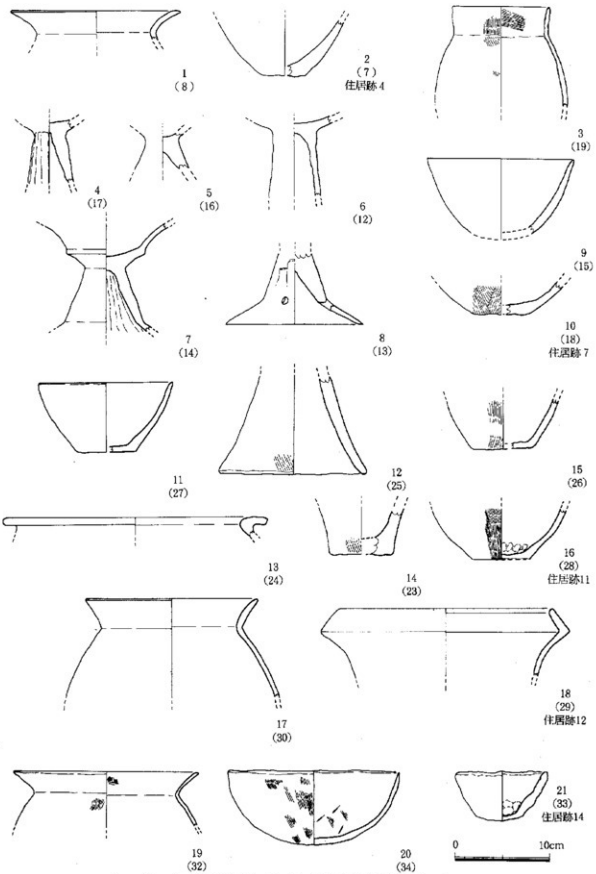


Fig. 6 住居跡4、7、11、12、14出土土器実測図（1：4）

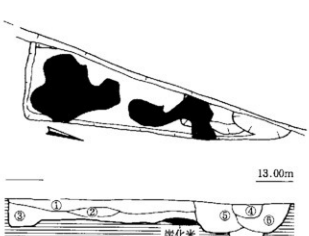


Fig. 7 住居跡14実測図（1：60）

住居跡19は南東隅部分しか残っていないが、東辺に幅1ｍほどのベッド状遺構を持っていることが知られる。

出土土器（Fig. 9） 後述する2を除くと、いずれも住居18の覆土出土である。住居跡の時期を知る遺物には乏しい。1は壷の肩部片である。大きく開く頸部を持ち、付け根には低い三角突帯を巡らし、板木口による刻目を施す。外面はハケメ、頸部内面はハケメの後ヨコナデを施す。2は壷の底部である。平底で、胴部は内湾し、丸みを帯びて立ち上がる。内外面ハケメで、底部内面には指頭痕が残る。出土位置を図示しているが、帰属が難しい。住居跡19に属するとすれば、廃絶後、住居跡18が作られた以後まで現位置を保っていたとは考えにくい。18に属するとしても、その出土位置から、使用時もしくは廃絶直後の位置とは考えにくい。いずれにしても時期決定の資料としては採用しづらい。3は厚い平底の甕底部で、弥生時代中期前半に属するものであり、混入と考えられる。4は壷であろうか。安定した平底で、わずかであるが丹塗の痕が見られる。4は高坏脚部。外面はハケメを施す。これらの遺物は、3を除くと弥生時代後期に属し、中頃までに収まると思われる。住居跡18は類似した住居である19を切ること、古墳時代前期初頭前後の住居跡26に切られることから、後期前半～後半の幅を持たせて考えておく。

住居跡20（Fig. 10） 西区中央南端で検出した。住居跡22を切り、土壙6に切られる。方形に近い長方形を呈する。南側が一部調査区外にでるが南北6.2ｍ、東西4.8ｍほどに復元できる。西辺以外の三辺にベッド状遺構を巡らせる。東辺の中央部を1.5ｍほどベッドを切り、入口と考えられる長方形の土壙を掘り込む。床は貼り床を持ち、ベッドも盛り土で築いている。主柱穴は2本である。床面中央の凹みは壁が焼けており、炉跡と考えられる。

出土土器（Fig. 11） 1は二重口縁壷である。口縁部は直立し、端部は垣面を持つ。頸部もほぼ直立する。胴部は球形状に強く張る。内外面ともハケメを施し、外面は頸部から口縁にかけて、ヨコナデによって消す。肩部にも粗いナデがかけられる。口径29.5cmを測る。床面出土である。2は庄内式系の小形の甕である。口縁は直線的に開く。胴部は偏球形で、細かいタタキを施した後、中位以下にハケメを施す。口縁は内外面ヨコナデ、胴部内面はケズリを施す。口径10.8cm、器高13.1cmを測る。3、4は内湾しながら開く布留式系の甕口縁部である。3は復元口径15.2cm、4は復元口径15.5cmを測る。4は床面出土。5は二重口縁壷として復元したが、頸部形態に疑問があり、中部瀬戸内系の器台など他の器種になるかも知れない。6は壷であろう。頸部に沈線を巡らす。頸部内面の調整は粗く、器台の可能性

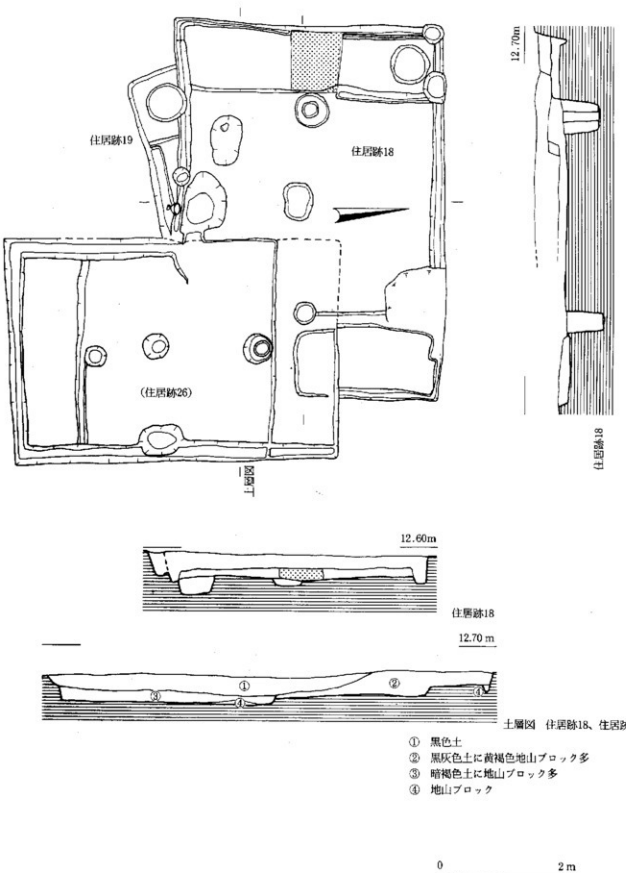


Fig. 8　住居跡18、19実測図（1：60）

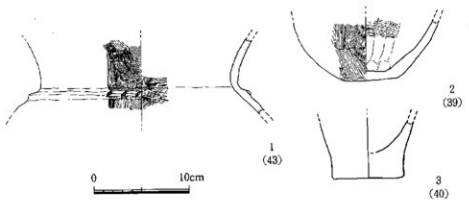


Fig. 9　住居跡18出土土器実測図（1：4）

もある。7は短頸壷である。わずかに外反しつつ開く口縁部を持つ。肩は張らない。胴部外面にハケメが見られる。頸部はヨコナデによって消されているものと思われる。口径19.2cmを測る。8は壷頸部である。付け根に突帯を巡らし、板木口による刻目を施す。9は高坏坏部である。下半部に鈍い段を持つ。10は高坏脚部である。裾部は大きく開き、屈曲部に4ヵ所穿孔する。11も脚部で、10より短く開き気味の脚柱部を持つ。穿孔は3ヵ所に施す。12は大きく開く坏部を持つ高坏である。坏部に比して脚部は小さく、裾部の開きも小さい。穿孔は屈曲部よりやや上位に2か所施される。高坏はいずれも畿内系のものである。13は椀状の坏部を持つ高坏の脚部であろう。ごく短い円柱部を持ち、大きく開く裾部にいたる。3ヵ所に穿孔する。裾部径21.6cmを測る。畿内系である。床面出土。14は小形丸底壷である。口縁部はわずかに内湾しながら開く。表面の磨滅が著しいが精製品と思われる。口径12.5cmを測る。15～17は椀である。いずれも内外面ナデ調整される。15は口径13cm、器高3.3cm。16は口径11.2cm、器高2.9cm。17は口縁端部を欠くが口径11cm、器高4cmほどに復元できる。18は底部である。平底である。19は小形の脚部で、外反しながら開く裾部を持つ。山陰系の低脚坏の脚部であろうか。これらの土器群は、主体をなすのは古墳時代初頭と考えられるが、5が壷であればやや新しい様相を示す。また1の大形壷も、類例に乏しいが、やや下がるのではないかと思われる。1は床面出土でもあることから、住居跡の時期は古墳時代初頭～前半の幅で考えておく。

住居跡21（Fig. 10）　住居跡11を切り、住居跡22にきられる。長方形に復元できよう。中央部を現代井戸で撹乱されるが、短辺4m、長辺4.5m以上を測る。井戸にきられた北側のピットを主柱穴の一つとする2本柱であろう。北辺に短辺の半分の長さのベッド状遺構を持つ。西辺の壁際に入口と思われる半円形のピットを持つ。図化に耐える遺物は出土していないが、住居跡11、22との切り合い関係から弥生時代後期中頃から後半の間に納まると考えられる。

住居跡22（Fig. 12）　住居跡21を切り、住居跡20に切られる。調査区内で最も規模の大きい住居跡である。長方形を呈し、短辺5.3m、長辺8.2mほどを測る。両端に幅1mほどのベッド状遺構を持つが、床面との比高差が30から40cmと比較的高い。ベッド際に比較的大形の掘方を持つ主柱穴がある。床面中央やや西側に炉を持つ。壁溝は、壁の周囲とベッドの落ち際のそれぞれに設けられている。

出土土器（Fig. 13、14）　1は長頸壷である。頸部付け根は強く締まり、口縁端部付近は内湾気味に伸びる。肩は余り張らないようである。2は大形甕の肩部である。口縁部付け根に断面三角の突帯を巡らす。内外面ともハケメ調整される。3は短頸壷である。口縁は短いが強く開く。口径は17cmである。4は複合口縁壷である。屈曲部より上位は直線的に内傾する。復元口径15.4cmを測る。5は椀である。口縁部は薄く尖らせる。口径13.2cm、器高4cmを測る。6は手づくねの小形鉢である。口径6cm、器高3

Fig. 10 住居跡20、21実測図（1：60）

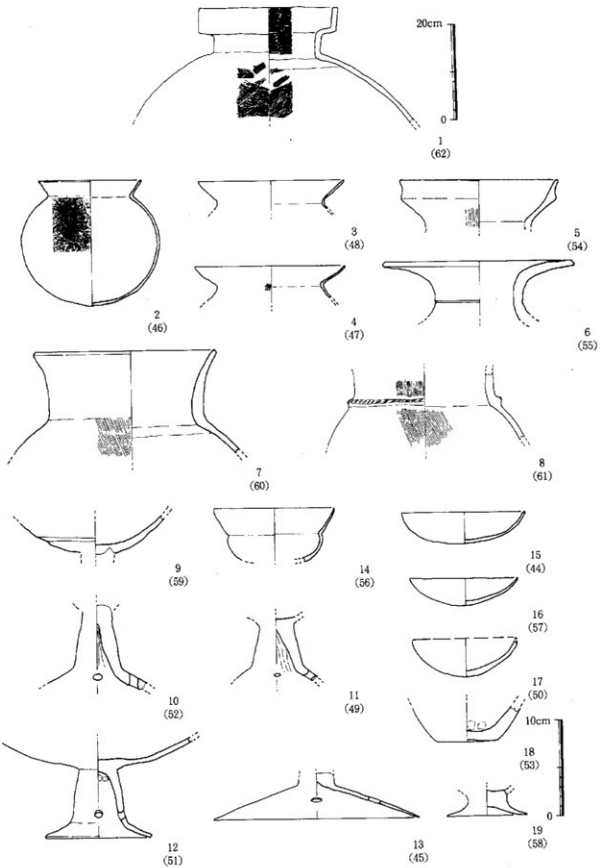
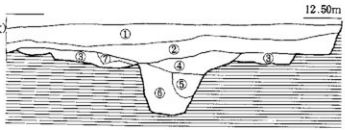
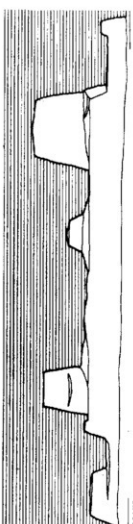
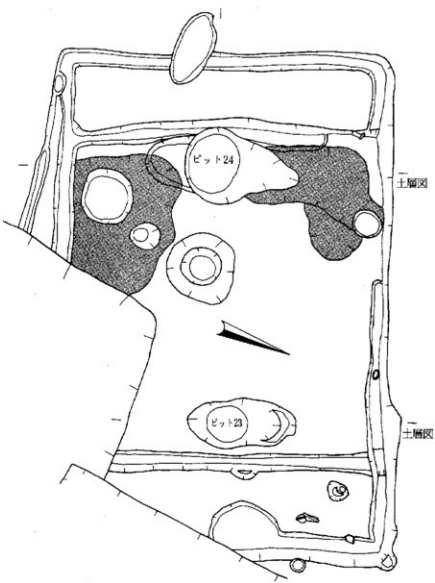


Fig. 11 住居跡20出土土器実測図（1：8、1：4）

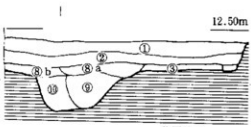
① 暗褐色土、地山小粒若干
② 黒色土、地山ブロック、焼土多い
③ 黄褐色ローム、黒色土混じる貼床
④ 黒色土、地山ブロック多い（②より少く粒が大）
⑤ 黒色土（地山ブロック多）
⑦ 黄褐色、地山ブロックに黒色土若干混ざる
⑦ 黒色土







⑧a 黒色土、地山ブロック（大）多
⑧b 黒色土
⑨ 黒色土に地山ブロック多
⑩ 黄褐色、地山ブロック、黒色土若干



住居跡22

Fig. 12 住居跡22実測図（1：60）

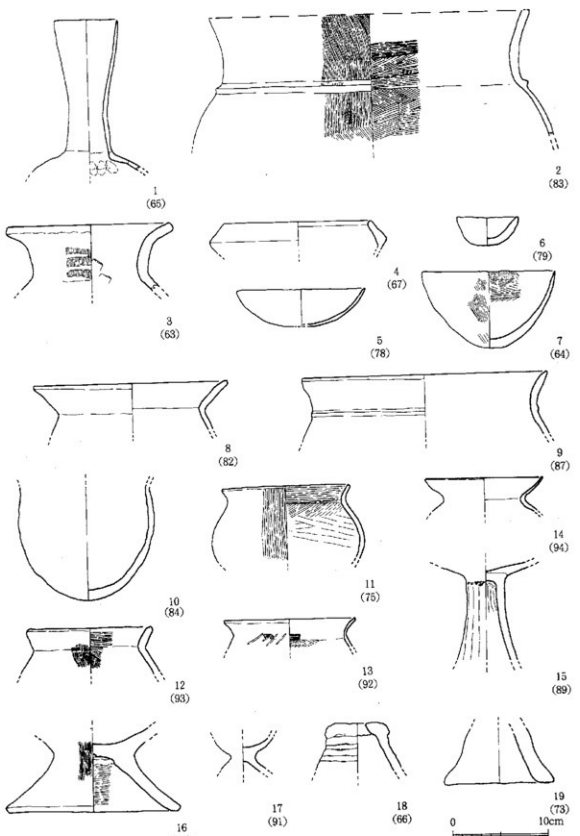


Fig. 13 住居跡22出土土器実測図(1) (1 : 4)

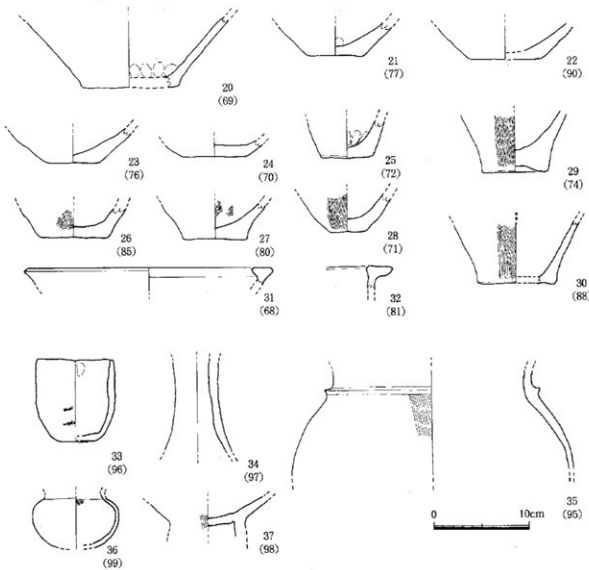


Fig. 14 住居跡22出土土器実測図(2) (1：4)

cmを測る。7は鉢である。やや尖り底気味の丸底で、安定が良くない。口縁端部は薄く尖らせる。内外面ハケメが見られる。口径14cm、器高8cmを測る。8は甕の口縁部である。長胴の在地系甕である。復元径20cmを測る。9も在地系甕である。口縁部付け根は締まりが弱く、突帯が1条巡る。口縁部は外反気味に開く。復元口径26cmを測る。10はは小形の甕である。口縁を欠く。丸底である。底部外面にケズリを施す。11も小形の甕である。短く開く口縁部を持つ。器高が低く、胴が張る。外面は縦方向のハケメを施す。復元口径13cmを測る。12も小形の甕である。口縁部は短く直線的に開く。内外面にハケメを施す。13も小形甕。外面はタタキの後ハケメを施す。14は布留式系統の甕である。復元口径12cmを測る。15は高坏脚部である。脚柱部はヘラナデされる。在地系である。16は脚付鉢の脚部であろう。脚部は強く踏張る。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。脚端径18cmを測る。17は小形高坏であろう。短い脚柱部は、ヘラナデされている。18は支脚である。外面は粗いタタキを施す。天井部に穿孔する。19も支脚の脚端部である。Fig. 14の20～30は底部である。平底が多いのは底部として見分けやすいためであり、必ずしも住居跡出土土器の特徴を示しているとは限らないが、平底でも安定感の悪いものが多いのは注意してよかろう。なお29、30は混入と思われる弥生中期の甕である。31、32も

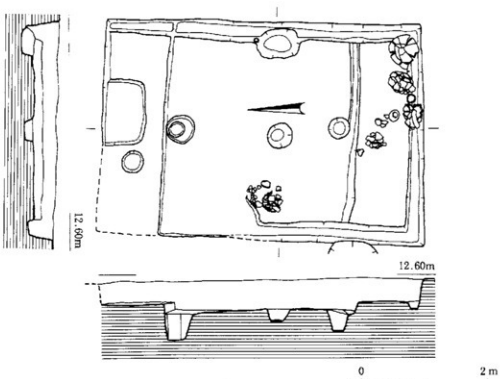


Fig. 15 住居跡26実測図（1：60）

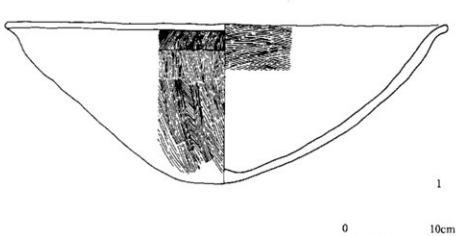


Fig. 16 住居跡26出土土器実測図(1)（1：4）

混入の弥生土器である。33～37は西側の主柱穴（ピット23）出土の土器である。33は口縁が直行するコップ型の土器である。外面にはハケメが見られる。底部は平底である。タコ壺の可能性もあるが、集落の立地から見ると疑問である。34は在地系の高坏脚部であろう。35は壺の肩部であろう。頸部付け根に断面三角の突帯を一条巡らす。肩は余り張らない。36、37は東側の主柱穴（ピット24）出土土器である。36は小形壺であろう。37は高坏と思われる。これらの土器から、混入の弥生中期土器を除き、14の古式土師器を、住居跡20からの混入と考えてこれも除くと、弥生時代後期後半～終末という時期が与えられよう。

住居跡26（Fig. 15） 西区の北側で検出した。住居跡11、18、19を切る。長方形を呈し、長辺5.2m、短辺3.6mを測る。長辺の両端に幅1ｍほどのベッド状遺構を設ける。ベッドは地山削出しである。主軸のベッド際に主柱穴を設ける２本柱である。中央やや南の小ピットは炉跡と考えられる。西壁中央に設けられた楕円形の土壙が入口と考えられる。遺物は比較的良好な状態で遺存しており、南側ベッド上に集中している。

出土土器（Fig. 16、17） １は鉢である。丸底の底部から、直線的に大きく開き、口縁部でわずかに屈曲する。端部は坦面をなす。外面は縦ハケ、口縁部内面横ハケを施す。口径46.6cm、器高16.6cmを測る。Fig. 17—2は偏球形の胴部を持つ鉢である。丸底で余り張らない胴部を持ち、短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は坦面をなす。外面は縦方向、内面は横方向のハケメを施す。口径31cm、器高20.5cmを測る。３は直口壺である。丸底に偏球形の胴部を持ち、わずかに内側にすぼまる口縁部を持つ。口縁の内外にはヨコナデを施し、胴部内外面はハケメを施す。口径18cm、器高28cmを測る。４も直口壺である。口縁はほぼ直行する。端部は坦面をなす。内外面ハケメを施す。口径15.5cm、器高27.3cmを測る。５も直口壺である。やや尖り気味の底部を持つ。口縁はほぼ直行する。一部磨滅があるが、内外面はハケメ調整であろう。口径13cm、器高27cmほどに復元される。６は小形の直口壺である。横長の偏球形胴部を持つ。外面はミガキを施しており、精製品である。口径13cmを測る。７は尖り底気味の底部を持つ小形壺である。単口縁で、端部近くでやや内湾する。口径9.5cm、器高８cmを測る。８は鉢である。丸底の浅い胴部から大きく開く口縁部を持つが、胴部と口縁部の境界ははっきりしない。口縁端部は薄く尖らせる。口径19cm、器高６cmを測る。9～12は単口縁の小形鉢である。丸底ないし尖り気味の底から大きく開き、口縁端部は薄く尖らせる。いずれも内外面ハケメ調整であろう。13は小形の底部であり、手づくねである。これらの土器からは古墳時代前期初頭～前半という時期に位置付けられよう。なお、1、2、4～6、10、11は南側ベッド上出土、３は床面出土である。

住居跡29（Fig. 18） 西区の南端で検出した。西側を攪乱で削平される。方形もしくは長方形で、東西2.1m以上、南北２m以上を測る。断面図に示したピット（ピット275）が主柱穴であるとすれば東西2.5mほどに復元できるが主柱穴としては浅く、疑問である。東壁際の半円形の土壙は入口の可能性もある。住居跡29を切り、西北隅のみ検出された**遺構30**は、西端に段があり、ベッド状遺構を持つ住居跡の可能性が強い。

出土土器（Fig. 20） １が住居跡29出土の低脚坏である。短く強く開く脚部を持ち、坏部はほぼ直線的に大きく開く。口径26cm、器高8.5cm、脚形7.4cmを測る。古墳時代初頭に属し、床面出土である。

住居跡31（Fig. 18） 西区の東南端で検出した。楕円形を呈し、他の住居跡が比較的定型的なだけに、住居跡としては疑問ものこる。長３m以上、幅3.3mを測る。図化に耐える遺物はない。

住居跡37（Fig. 18） 東区南端で検出した。ほとんど壁溝のみの検出である。方形もしくは長方形で、東西5.2m、南北3.2m以上を測る。断面に示したピットは主柱穴としては浅く疑問である。中央部に火を受けた部分があり、炉跡と考えられる。

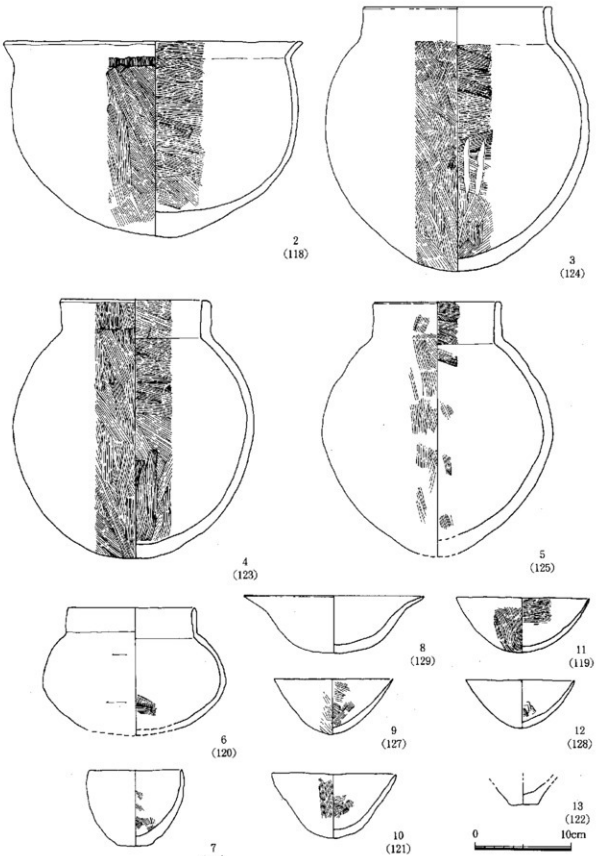


Fig. 17 住居跡26出土土器実測図(2) (1：4)

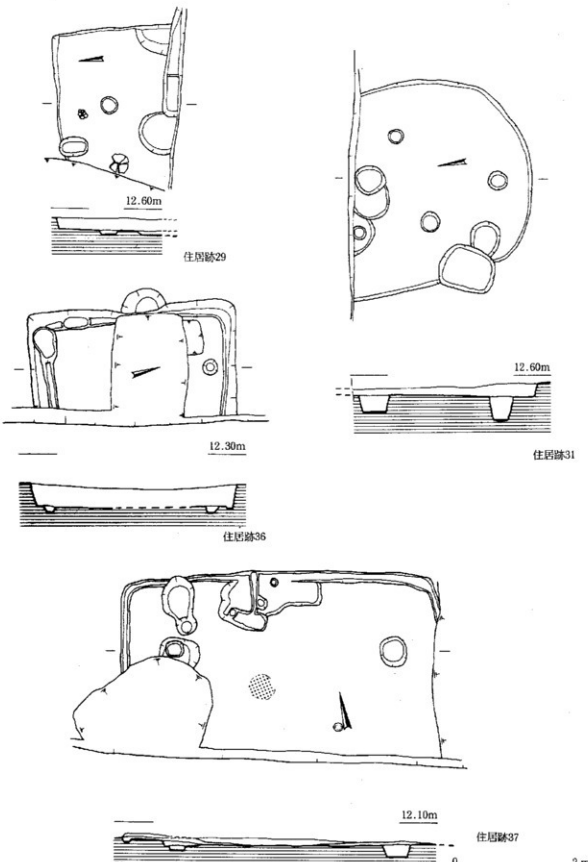


Fig. 18 住居跡29、31、36、37実測図（1：60）

出土土器（Fig. 20） いずれも弥生時代中期前半頃の甕形土器である。鋤先口縁から余り張らない胴部に至る。遺存の悪い住居跡であるので、即住居跡の時期を示す遺物であるか疑問である。

(2) 古代の住居跡

古代に属する住居跡は3基検出した。瓦をもつ遺構との先後関係から時期差を認めうる。

住居跡2（Fig. 19） 古代溝25のすぐ東側で検出した。遺存は極めて悪い。若干東西に長い長方形を呈し、長辺4m、短辺3mを測る。北、東、南の三辺に壁溝が見られる。主柱穴は特定できない。東壁の中央やや北側に壁際からやや離れて瓦を用いた施設が設けられている。3枚の平瓦を壁に沿って弧状に並べている。前面の凹みには焼土が見られ、煮沸用と思われる甕破片も散布することから竈に類した施設ではないかと考えられる。瓦は溝25などから出土するものと同じで、瓦葺建物の廃絶後落下した瓦を転用したものと考えられるから、住居跡2は瓦葺建物より新しいと考えられる。

出土土器（Fig. 20） 4は甕である。外反しながら大きく屈曲する口縁部を持つ。外面はハケメ、内面にはケズリを施す。5も甕である。短く開く口縁部を持ち、内面はケズリを施す。4、5とも瓦組施設付近で出土した。6は余り開かない口縁部をもつ甕破片である。外面では口縁部と胴部の区別が曖昧である。4から6は土師器である。7は坏蓋である。端部は甘く屈曲する。器高は低く、平板である。つまみも接合部でほとんどくびれず、円盤形に近い。口径14.4cmを測る。8も坏蓋であろう。短く甘く屈曲する口縁部を持つ。天井部は内外とも静止ナデを施す。復元口径17.8cmを測る。9は高台付の坏である。高台は短く外傾する。内底部は静止ナデである。口径12.5cmを測る。10も高台付の坏である。高台は短く内傾気味である。口縁部は直線的に大きく開く。内底部は静止ナデを施す。口径16.5cm、器高5.8cmを測る。11も同様な坏である。口径16cm、器高5.6cmを測る。7～11は須恵器である。

住居跡8（Fig. 19） 西区の北側中央付近で検出した。ほぼ方形を呈する。東西3.8m、南北4.2mを測る。主柱穴は見当らない。四周に壁溝が巡る。竈は見られない。この住居跡の覆土には、上層の下面を中心に瓦が多く見られた。この状況は住居跡の廃絶後ある程度埋まった後凹みに瓦が投棄された状況を示していると考えられる。したがってこの住居は瓦葺建物より先行もしくは同時期に機能していたものと考えられる。

出土土器（Fig. 20） 12は土師器甕である。口縁端部付近で短く強く屈曲する。口縁部と胴部の境界は内外ともはっきりしない。胴部内面はケズリ、外面はハケメを施す。復元口径16cmを測る。13は須恵器の高台付坏である。高台は外側へ強く張り出す。14も同様の坏であろう。これらの遺物は床面出土の12を除くといずれも覆土出土で住居跡の時期を直接示すかどうかは疑問であるが、高台の特徴などから見て、住居跡2より古いことは理解されるであろう。

住居跡36（Fig. 18） 東区東端で検出した。中央部を防空壕で大きく削平される。方形もしくは長方形に復元され、南北3.4m、東西2m以上を測る。周囲に壁溝が巡る。検出範囲内に主柱穴は見当らない。

出土土器（Fig. 20） 15は甕である。直線的に開く口縁部を持つ。胴部内面はケズリ、外面は縦ハケを施す。口縁部は外面ヨコナデ、内面横ハケを施す。復元口径22cmを測る。16は小形の甕である。短く強く外反する口縁部である。復元口径17cmを測る。

3．井戸、土壙

確実に井戸と考えられる遺構は3基検出した。土壙は性格不明のものが多く、ここでは主なもののみ報告する。その他、遺物を包含したピットについても報告する。

井戸33（Fig. 21） 住居跡2の南側で検出した。土壙1には切られると思われる。土壙35を切る。ほ

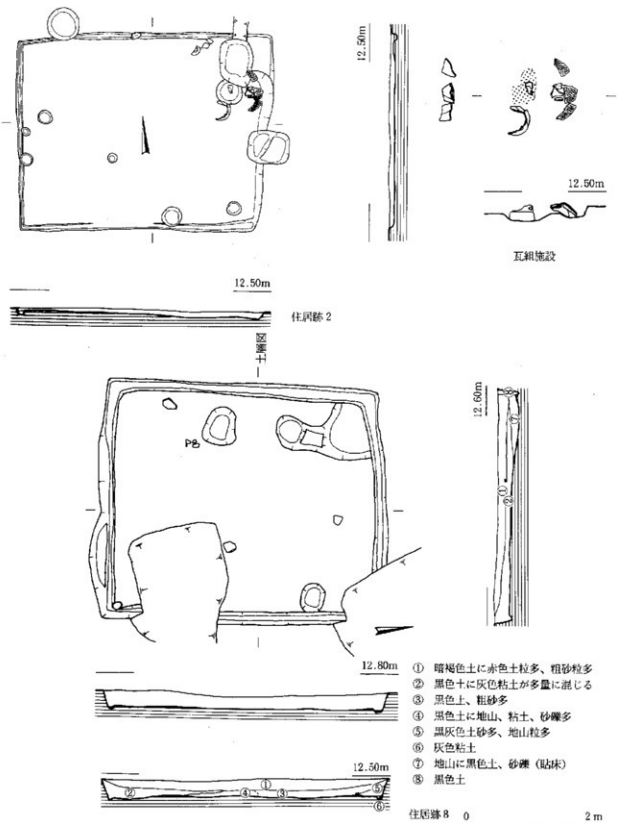


Fig. 19 住居跡 2、8 実測図（1：60）

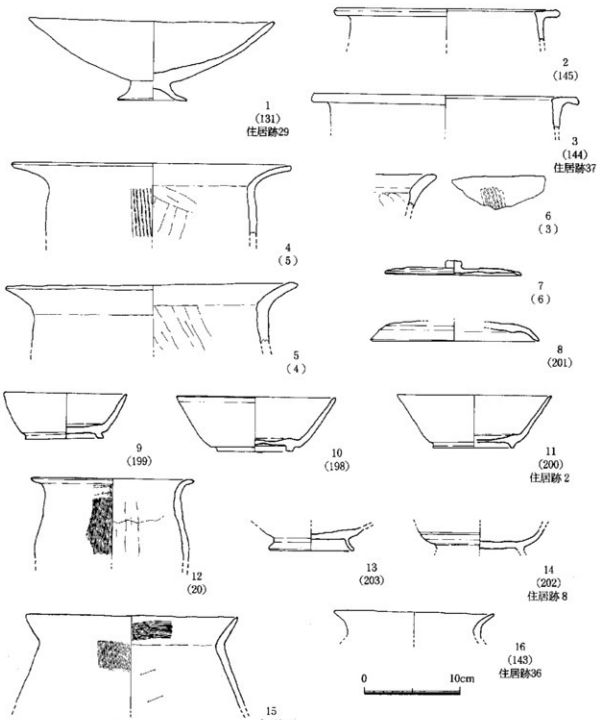


Fig. 20　住居跡29、37、2、8、36出土土器実測図（1：4）

ぼ円形で、径1.5mを測る。現況で深さ1.7mを測る。断面は逆円錐台状を呈する。

出土土器（Fig. 22）　1は甕である。外面は口縁部まで縦方向のハケメ、胴部内面はケズリを施す。復元口径14.6cmを測る。2は壺である。口縁は屈曲して直線的に大きく開く。短いすぼまり気味の頸部を持ち、胴部との境は内面には稜が立つ。口径18cmを測る。3も甕の口縁である。布留式系の甕であろうか、小片で良くわからない。4は壺の口縁部である。端部には坦面を作り、3条の沈線を巡らす。復元

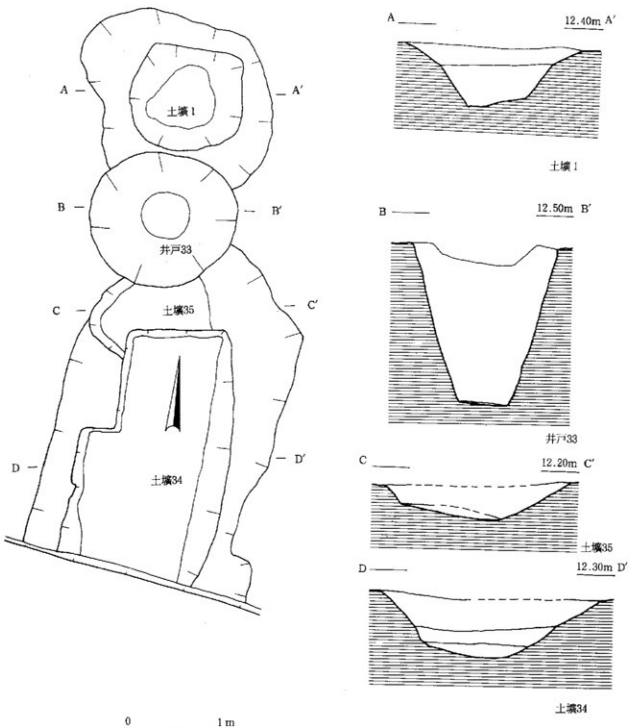


Fig. 21　井戸33、土壙1、34、35実測図（1：40）

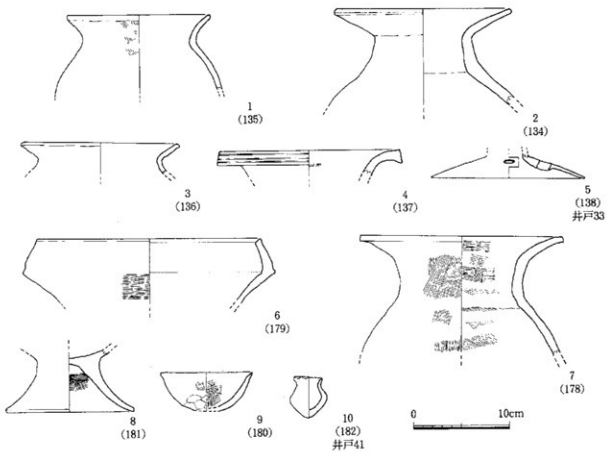
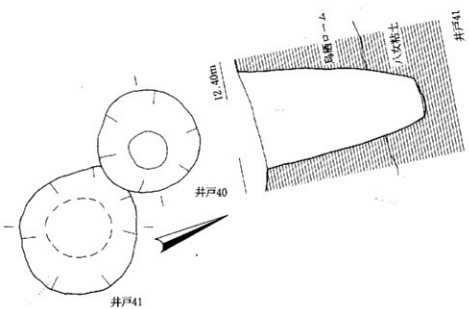


Fig. 22　井戸33、41出土土器実測図（1：4）

口径19cmを測る。5は小形高坏の脚部である。穿孔を持ち、残存部から復元すると、5か所ほどになる。2、4、5は中部瀬戸内系の土器であり、時期は弥生時代終末～古墳時代初頭に位置付けられる。

井戸40（Fig. 23）　調査区の北東隅で検出した。井戸41に切られる。ほぼ円形で、径1.3mを測る。現況では深さ2.2mを測る。鳥栖ロームと八女粘土の境界付近からややオーバーハングする。湧水と壁の崩落で底面を確認できなかったが、覆土の状況や、遺物の出土状況から見て、ほぼ底面近くまで掘りきったのではないかと考えている。

出土土器（Fig. 24、25）　Fig. 24に掲げたのは甕形土器である。1はほぼ完形に復元できる。底径の大きい樽形を呈する。口縁部下に突帯を一条巡らす。胴部外面はミガキを施し、上半部は横方向、下半部は縦方向である。口径20.5cm、器高18.8cm、底径10.8cmを測る。全面に炭素の吸着が見られ、黒色磨研されていたと思われる。他はいずれも口縁部片で、鋤先状を呈する。外面はハケメ、内面はナデを施す。2のように突帯を巡らすものもある。また14のようにやや「く」字に近く、胴がやや張るものも見られる。Fig. 25の15から20は底部である。15から17は甕であろう。外面はハケメを施す。18は壺であろう。外面はミガキを施す。底部に赤色顔料の痕跡が見られ、丹塗磨研土器と考えられる。19は樽形に近い甕であろう。外面はミガキを施す。1のような器形になるものであろう。21～27は壺である。21は無頸壺であるが、該期の通有の無頸壺と比べると、口縁の立上りが強く、また比較的長い。口縁端は坦面をなし、肩は強く張る。内外面に横方向のミガキを施す。黒色磨研である。口径13.5cm、器高15.5cm、底径3.7cmを測る。22、23は単口縁の広口壺。いずれも黒色磨研で、外面には暗文を施す。



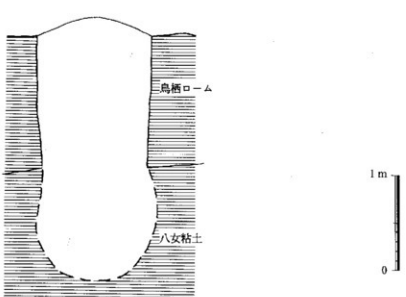


Fig. 23 井戸40、41実測図（1：40）

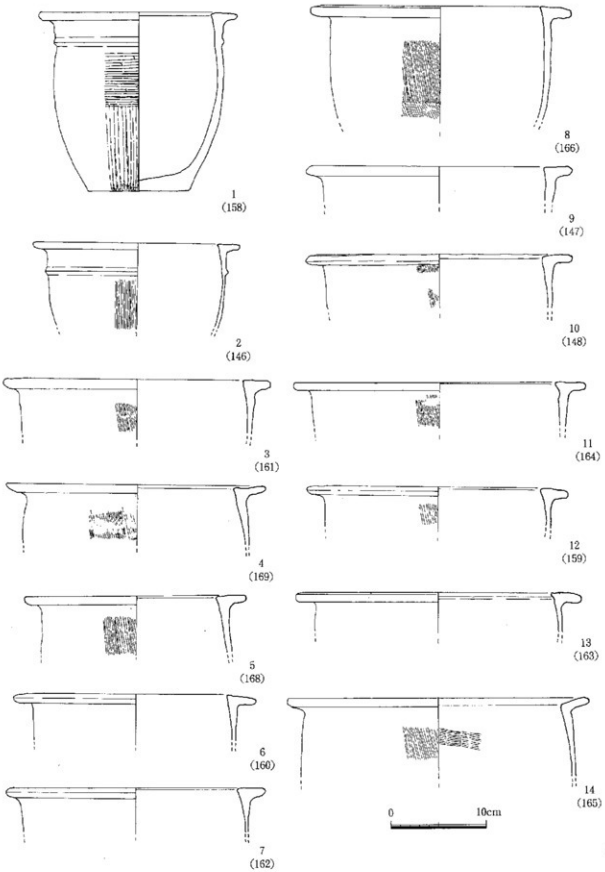


Fig. 24　井戸40出土土器実測図(2) (1：4)

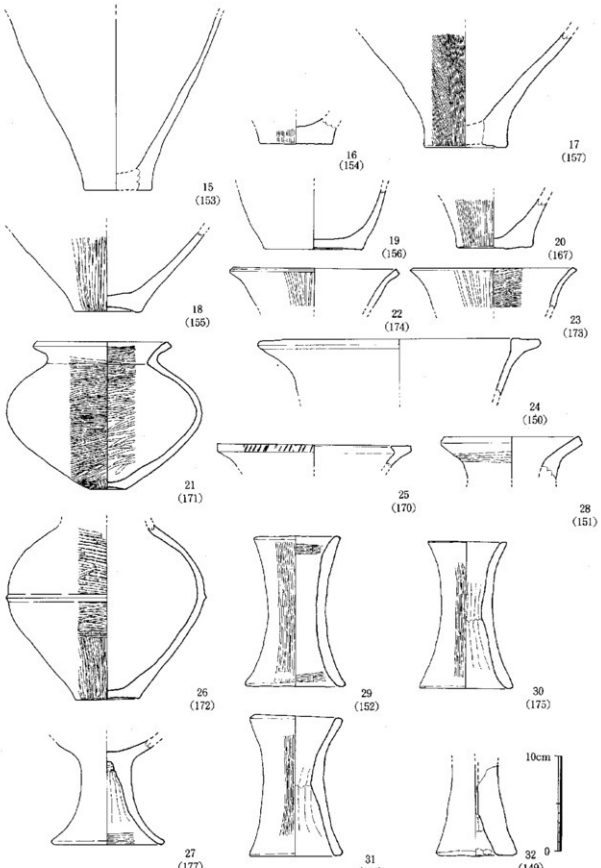


Fig. 25 井戸40出土土器実測図(1) (1：4)

23は口縁内側にもミガキが及ぶが、22は内側は横ナデである。24、25は鍛先口縁の広口壷である。25は口縁端部に刻目を施す。26は壷の胴部であるが、少し変わった器形で、どのような口縁部が付くのか良くわからないが、あるいは直接鍛先口縁が付き、胴部の張った甕形を呈するのかも知れない。外面はミガキを施し、胴部中位に突帯を1条巡らせる。27は高坏である。比較的短い脚で、裾も余り広がらない。外面にはミガキを施す。28～32は器台である。28は外面にタタキを施す。29～31は上下の区別が余りはっきりしない円筒状を呈するものである。外面はいずれもハケメを施す。32は厚手のものである。28と32は弥生時代後期の特徴を持っている。注記によると検出直後出土土器の中に含まれているので、切り合う井戸41からの混入の可能性がある。この土器を除くと、井戸40出土土器は、いずれも弥生時代中期中頃に位置付けられよう。

井戸41（Fig. 23） 井戸40のすぐ北側で検出した。ほぼ円形を呈し、径1.1mを測る。現況で深さ1.7mを測り、断面は逆円錐台状を呈する。井戸40を切る。八女粘土を50cmほど掘り込んだところで止まっている。

出土土器（Fig. 22） 6～10が井戸41の出土土器である。6は複合口縁壷である。屈曲部以上はわずかに内湾しながらすぼまる。端部は内側に傾斜する坦面をなし、わずかに上方へつまみ出す。外面はハケメを施す。7は広口壷である。短い円筒状の頸部を持ち、大きく外側へ開く口縁部を持つ。端部は坦面をなす。内外面ハケメを施す。8は台付鉢の脚部である。裾部は外側へ開き安定感がある。脚端径13.4cmを測る。9は小形の鉢である。単口縁で端部をわずかに外側へつまみ出す。10はミニチュアの壷である。器高4.2cmを測る。

土壙1（Fig. 21） 井戸33のすぐ北側で検出した。井戸33を切る。丸みを帯びた方形を呈し、二段掘りである。径1.8mほどを測る。

出土土器（Fig. 22） 1、2が土壙1出土土器である。1は高坏脚部。裾部で大きく広がる。2は器台である。いずれも弥生時代後期～古墳時代初頭に属すると思われるが、後期終末～古墳時代初頭に位置付けられる井戸33を切ることや、覆土の状況が、他の古代遺物を包含する遺構に類似した褐色土であることから、該期まで下がる可能性もある。

土壙34（Fig. 21） 井戸33の南側で検出した。土壙35を切るが、井戸33とは直接の切り合い関係はない。長方形と考えられ、長2.5m、幅1.7mを測る。

出土土器（Fig. 22） 3～5が土壙34出土土器である。2は弥生土器の大形甕。4は弥生時代後期後半以降の支脚である。5は古墳時代後期以降の土師器甕の把手である。

土壙6（Fig. 26） 古代溝25の西側で検出した。長方形を呈し、長6.4m、幅2mを測る。平面形は比較的整っているが、床は平坦ではなく、段や凹凸が多い。住居跡7、20、22を切り、また切り合い関係にある遺構のほとんどを切る。図化に耐える遺物はFig. 27に示すように弥生時代、古墳時代初頭の遺物のみであるが、この切り合い関係、また主軸方向が古代溝25や、古代住居2、8と同様ほぼ南北方向に向くことから該期に属する可能性が高いと考えられる。

出土遺物（Fig. 27） 6～8が土壙6出土遺物である。6は弥生時代中期の広口壷、7は同時期の甕底部、8は古墳時代初頭の小形器台脚部である。

ピット27（Fig. 26） 調査区の北端近くで検出した。ピット内から完形の甕が出土した。床面からはかなり浮いた位置から出土している。ピットは掘立柱建物を構成するようなものではないようである。

出土土器（Fig. 27） 布留式系統の甕形土器である。口縁は直線的に広がる。胴部は球形で、底部内面には指頭痕がみられる。口径13cm、器高14cmを測る。

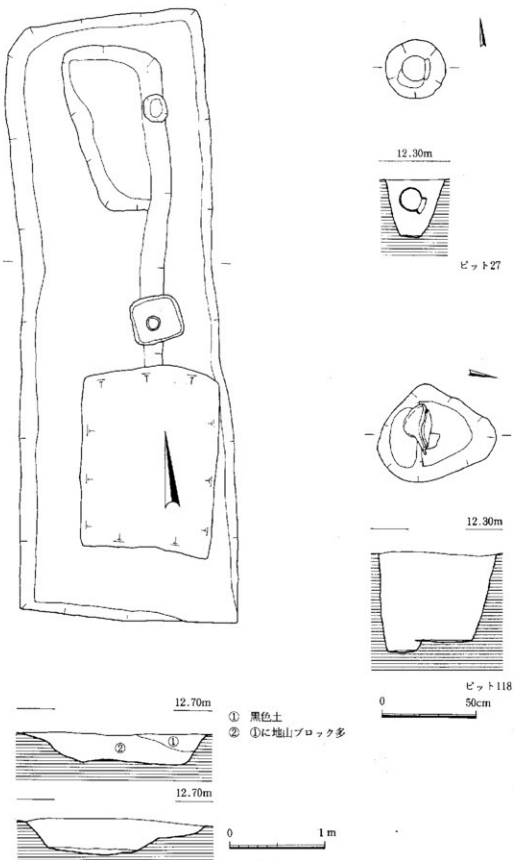


Fig. 26 土壙6実測図（1：40）、ピット27、118実測図（1：20）

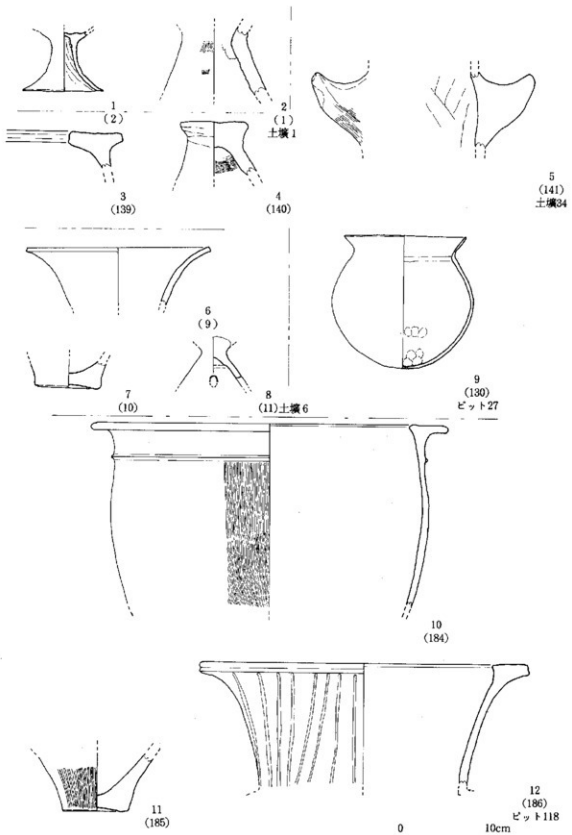


Fig. 27 土壙1、34、6、ピット27、118出土土器実測図（1：4）

ピット118（Fig. 26） 溝25の西側で検出した。ピット内から弥生土器が出土している。底面に低い段がある。出土土器は弥生時代中期中頃のもので、円弧状の壁溝の一部のみ検出している住居跡5に関連した遺構の可能性がある。

出土土器（Fig. 27） 10～12がピット118出土土器である。10は甕である。鋤先口縁で、口縁部下に突帯を1条巡らす。11は同様な甕の底部であろう。12は鋤先口縁の広口壷である。端部は広い坦面をなす。内外面ともミガキを施し、外面には暗文を施す。

4．溝（Fig. 28）

溝は**溝25**の一条のみ検出した。調査区全体を南北に貫き、北側、南側とも調査区外にでる。北側の延長は不明であるが、南側は、南接する隣地中央に東西にいれた試掘トレンチには該当する遺構が見られないことから、調査区境界から10m以上は伸びないようである。方向は調査区に任意に設定した座標軸にほぼ平行している。この座標の方向は、磁北から6度強東に振れているので、ほぼ真北を意識したものと判断してよかろう。調査区内での延長は23.3mを測る。幅は検出面では1～1.5mを測るが、床面から上位30～40cmほどは、幅30cmほどで壁は直に立ち、その上から急に壁が崩れて広がったような状況を示し、その結果断面はY字状を呈する。北端と南端の比高差は10cmほどで、ほぼ平坦といえよう。

溝の中からは多量の瓦が出土した。瓦は中位の段より上層からの出土がほとんどで、溝が機能しなくなってからの投棄と思われる。総量はコンテナ25箱ほどに及ぶ。その内平瓦は21箱、丸瓦は4箱である。また軒瓦は軒丸瓦8点、軒平瓦2点に過ぎない。この他須恵器、土師器なども少量出土している。この溝の性格については、まとめにおいて総合的に考察することにしたいが、極めて特殊な遺構であることは間違いない。

出土遺物（Fig. 29） 出土遺物のうち瓦については後でまとめて述べることとして、その他の遺物について述べておく。1～3は坏蓋である。1、2はかえりを持つもので、1は口縁端よりかえりが下にでるが2は端部より上位にあり、深みがある。3は口縁端を折り返すものである。4～6は高台付きの坏である。4はほぼ直角に付くが、5、6ではやや外側に張り出す。7から9は皿の口縁部片である。1～9は須恵器。10～17は土師器把手である。上方に強く折曲げる10、12、17のようなものと、ほぼ横に張り出す14～16のようなものがある。18は土師器甕。口縁部端は上下にわずかに拡張して、坦面をなす。19は土師器脚。かなり小形の器種であろうが、器形は良くわからない。20は器台脚。弥生時代後期のものの混入の可能性がある。

5．出土瓦について

これまで何度か触れたように、井尻B遺跡3次調査では古代の瓦が多量に出土した。瓦が出土した遺構は、溝25を始め、住居跡、包含層などいくつかあるが、ここでまとめて述べておきたい。

まず瓦を出土した遺構を列挙しておく。既に報告したものについても再度挙げておこう。

溝25 南北方向の溝状遺構。総量でコンテナ25箱程度。既報告。

住居跡8 方形の古代住居。コンテナ2箱程度。覆土上層から出土。既報告。

住居跡2 方形の古代住居。竈関連施設と思われる瓦組施設に転用。既報告。

北端部包含層（Fig. 48） 調査区北端、住居跡12の西側付近で、遺構検出中に瓦の散布を確認した。瓦を包含する土層は灰褐色土で、住居跡12など黒色土を覆土とする遺構を切っていた。検出時には当然掘方を持つ遺構と考えて、プランの確認を行ないつつ精査した。その結果、この灰褐色土層は、遺

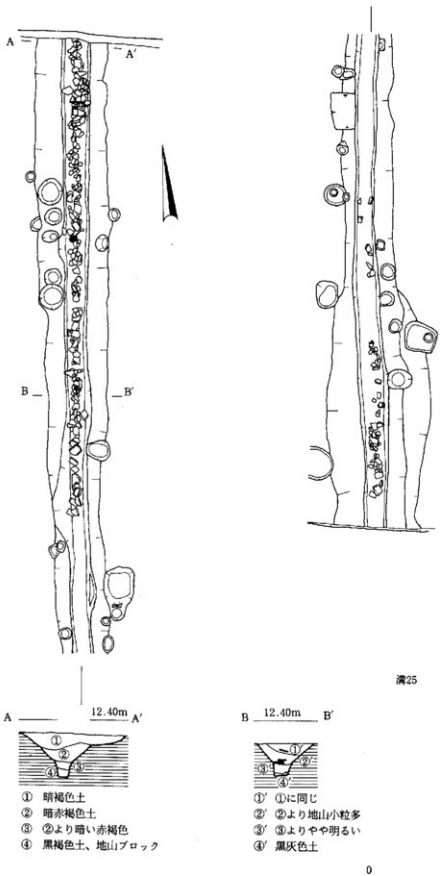


Fig. 28 溝25実測図（1：80）

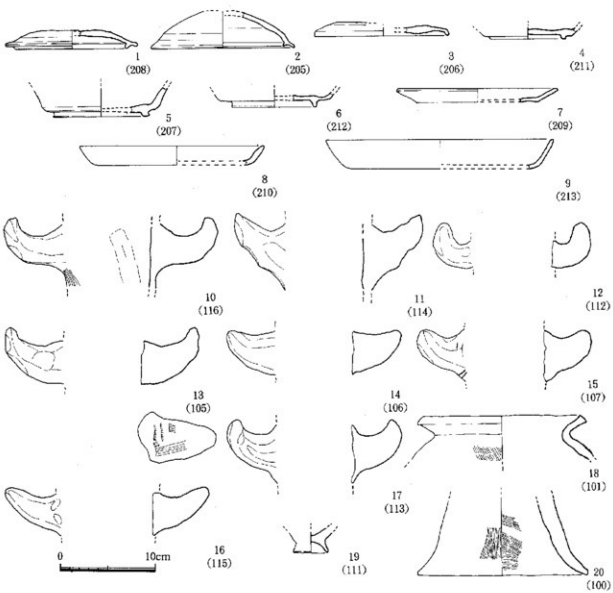


Fig. 29　溝25出土土器実測図（1：4）

構ではなく、包含層であることが判明した。すなわち、鳥栖ロームの地山、遺構覆土と同様の黒色土の薄い堆積、更にこの上層に瓦を含む灰褐色土が堆積するという状況である。この包含層からも、コンテナ2箱程度の瓦が出土している。この堆積土についてはまとめにおいて再び触れることにする。

以上が瓦を出土した遺構である。瓦そのものについては遺物の説明の項で述べるように細かい差異がある。しかし、出土遺構によって出土する瓦が異なるということはない。

それでは、出土した瓦について述べておこう。図示した瓦は出土したもののすべてでは無論なく、製作技法の特徴などで大別した後、遺存のよい代表的なもののみ挙げている。浅学のため分類基準などが不適切である危惧があるが、できるだけ大縮尺でかつ多く図示するよう心がけたので了承願いたい。なお、図示した瓦はすべて溝25出土のものである。

軒丸瓦（Fig. 30）　出土した軒丸瓦は全部で7点である。いずれもいわゆる百済系単弁瓦である。1は外区の一部を欠く。外縁には三条の圏線が巡る。内区は八葉の蓮弁と中房、間弁から成る。蓮弁は

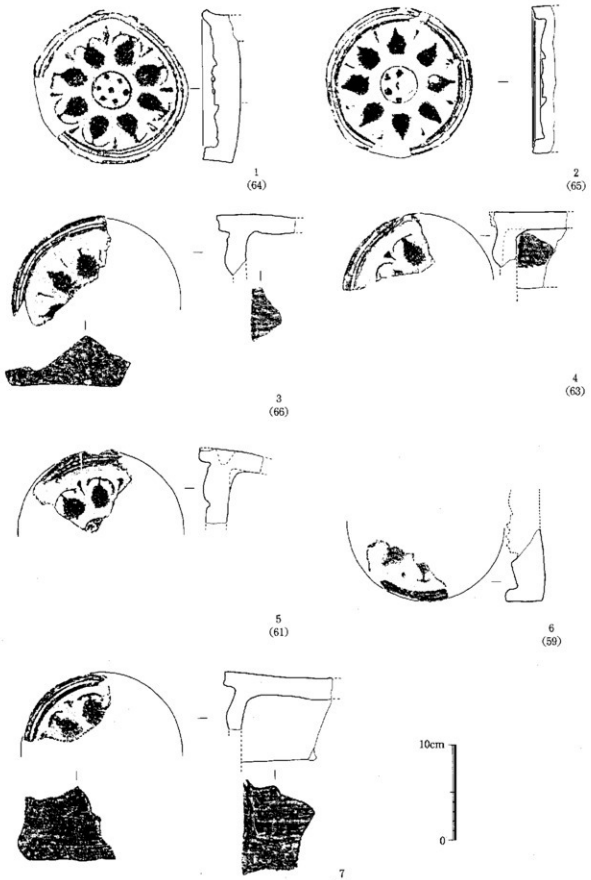


Fig. 30 軒丸瓦実測図（1：4）

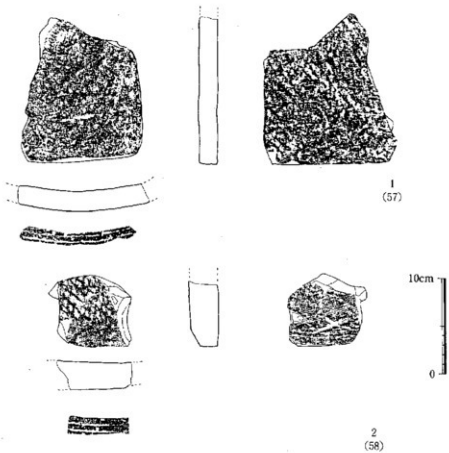


Fig. 31　軒平瓦実測図（1：4）

明瞭で、先端の反りがよく表現されている。蓮弁中央の稜は、反りの部分のみに甘く立つ。中房の蓮子は1—6の配置である。全面に粘土の切れ目や、しわが多く、また細かな条線が観察される。瓦当笵に薄い布様のものを張った痕跡であろうか。外区径15.7cm、内区径13.3cm、中房径4.1cmを測る。厚さは2から3cmを測る。2も外区の一部を欠くが、ほぼ全容がしられる。外縁は三条の圏線が巡る。蓮弁は八葉である。蓮弁先端の反りは不明瞭で、稜線もはっきりしない。中房は一部磨滅しているが、蓮子は1—6配置である。中房の輪郭線は、1に比べて突線状をなし、圏線状になる。裏面は剝離しており、製作法を知る上で参考になる。外区径15.5cm、内区径12.7cm、中房径4.1cmを測る。現状での厚さ1～1.5cmを測る。3は蓮弁の一部のみの破片である。外縁は三条の圏線が巡るが、部分的に四条になる。蓮弁の先端は反りを持ち、稜線は甘い。径は1、2よりやや大きく、外区径16～17cmに復元される。丸瓦部は凸面にはケズリを施し、凹面は布目と竹状模骨痕が見られる。4も三条の外縁圏線、反りを持つ蓮弁からなる。丸瓦部の凸面はケズリの後ナデ消している。凹面は布目と模骨痕が残る。5は中房の一部ものこる。外縁の圏線は三条、蓮弁は反り、稜線とも明瞭である。6は磨滅が著しいが、外縁は三条の圏線である。蓮弁は反りを表現しているようである。外区径16.4cm程に復元できる。7も外縁に三条の圏線を巡らす。蓮弁は反りは不明瞭であるが、中央の稜線は比較的明瞭である。丸瓦部は凸面は横方向のケズリ、凹面は布目と竹状模骨痕が残る。1～5は暗灰色を呈し、堅緻な焼成である。丸瓦部の接合は、2に見られるように瓦当部の約半分の厚さ（1cm程度）を笵に当てて瓦当部を作り、その上半部に丸瓦部を接合し、瓦当部裏面全体に更に1cm程度の粘土を補塡して補強し、厚さ2～3cmの瓦当部を作る。これをA技法とする。これに対し6、7は灰白色で、焼成も軟質である。7の接合法は瓦当の裏側に直接丸瓦を接合し、接合部のみ粘土で補強する。従って7の厚さは1.5cmほどで、1～5より薄い。これをB技法とする。6は7と色調、焼成が似るが、厚さが2.5～3cmと厚く、A技法によるかも

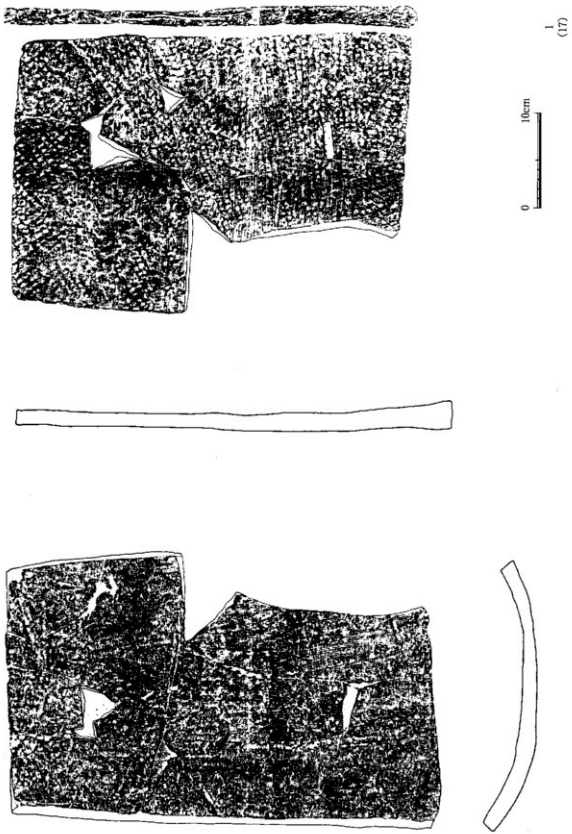


Fig. 32 平瓦実測図(1) (1 : 4)

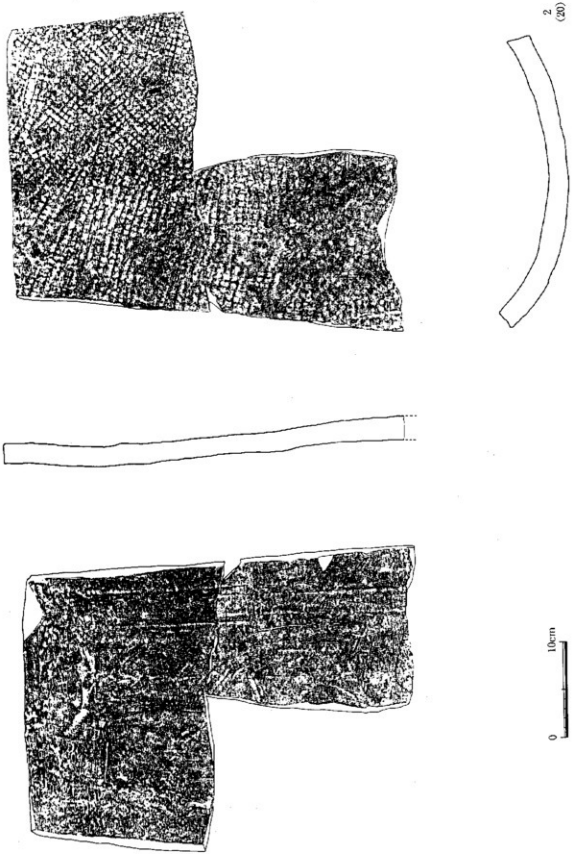


Fig. 33 平瓦実測図(2) (1 : 4)

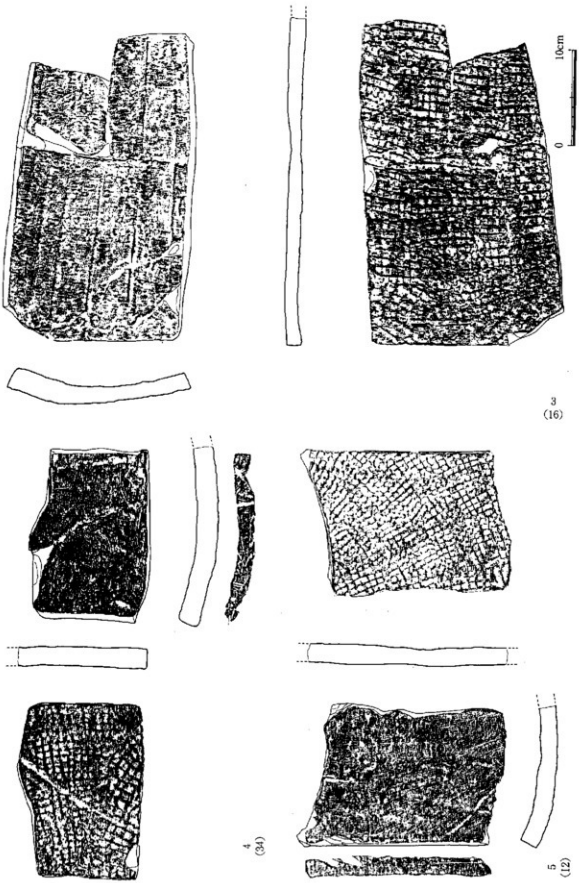


Fig. 34 平瓦実測図(3) (1：4)

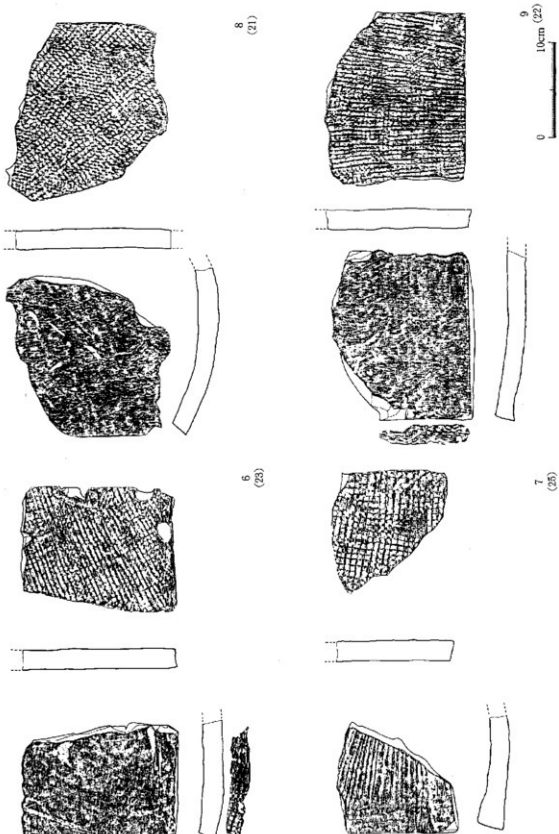


Fig. 35 平瓦実測図(4) (1 : 4)

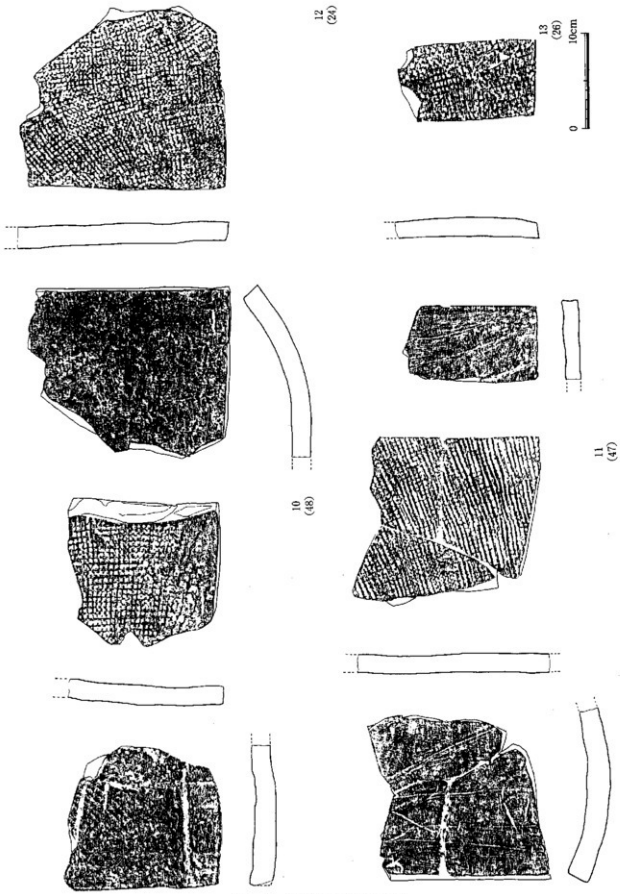


Fig. 36 平瓦実測図(5) (1 : 4)

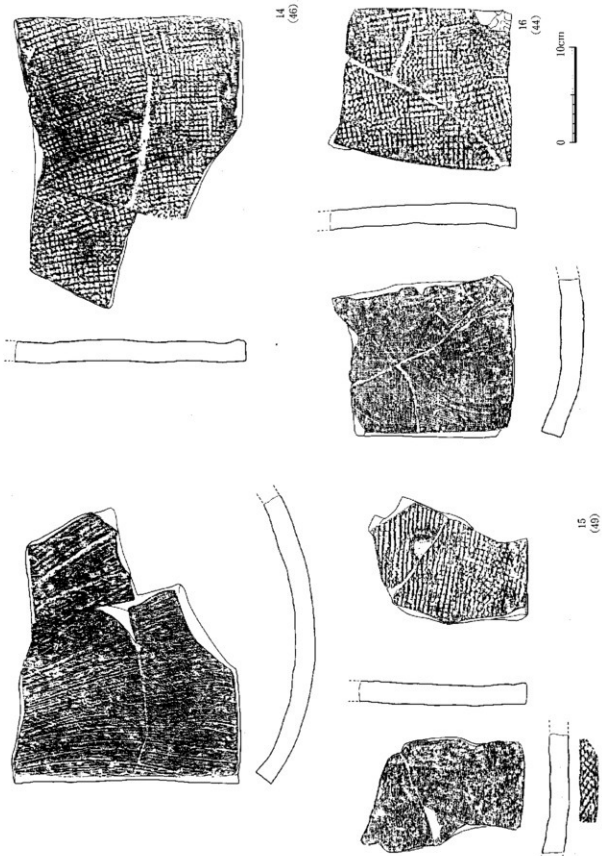


Fig. 37 平瓦実測図(6) (1 : 4)

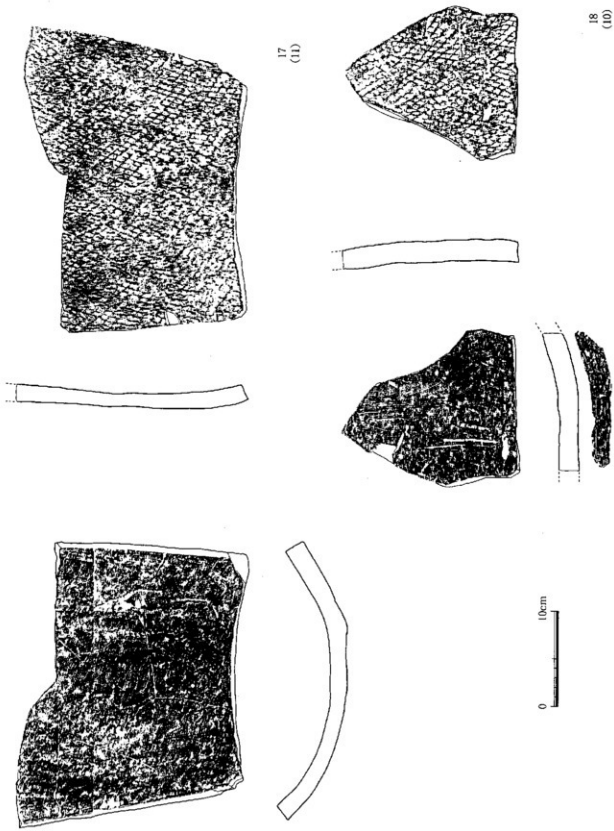


Fig. 38　平瓦実測図(7) (1：4)

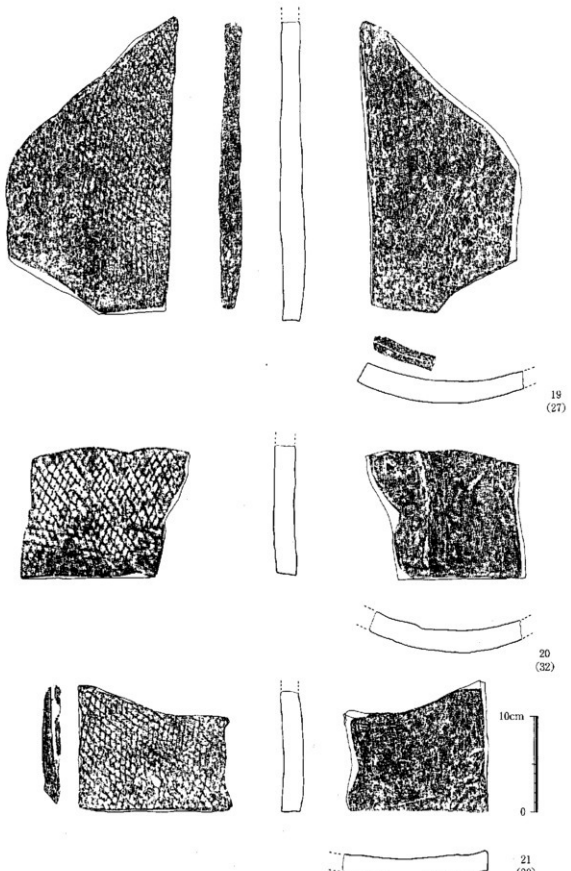


Fig. 39 平瓦実測図(8) (1：4)

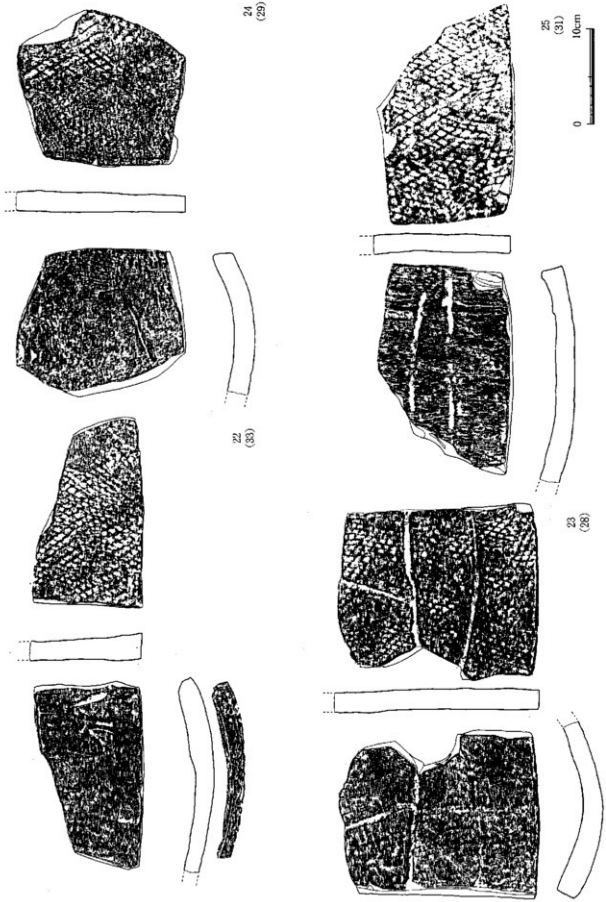


Fig. 40 平瓦実測図(9)(1：4)

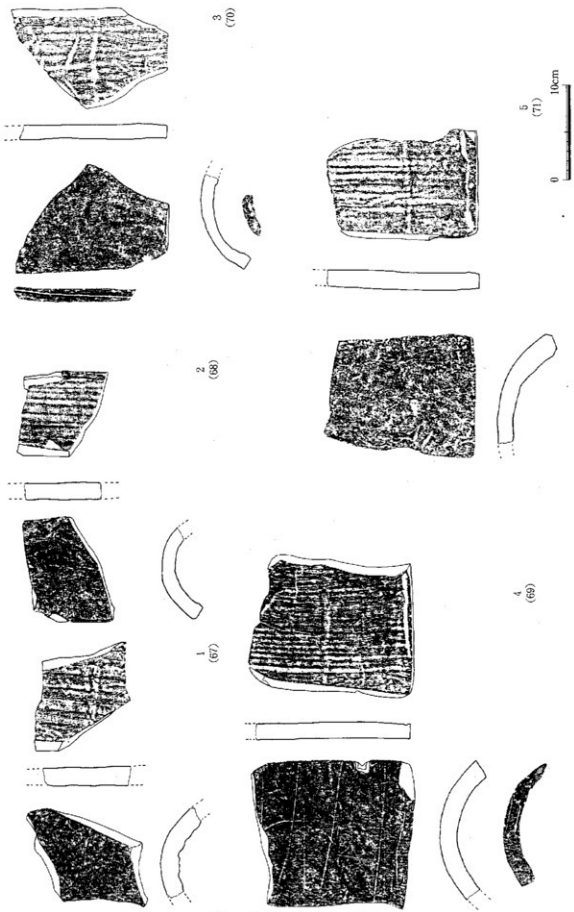


Fig. 41 丸瓦実測図(1) (1 : 4)

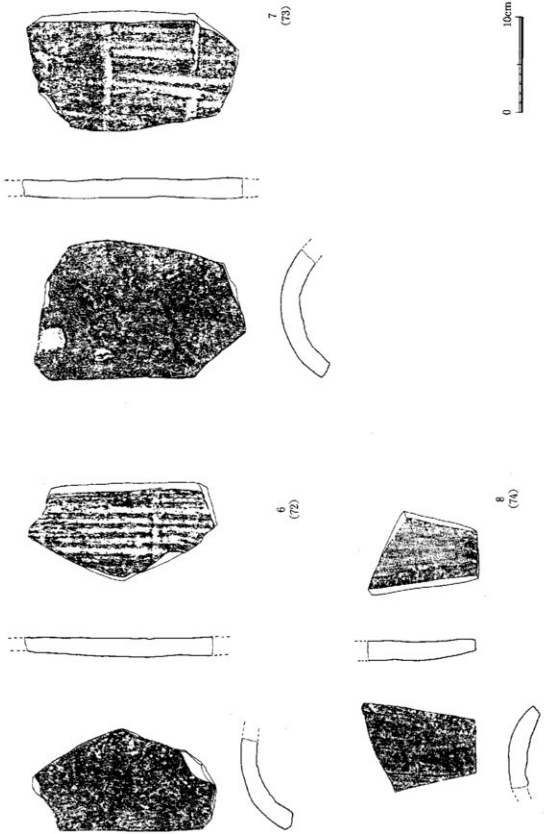


Fig. 42 丸瓦実測図(2) (1 : 4)

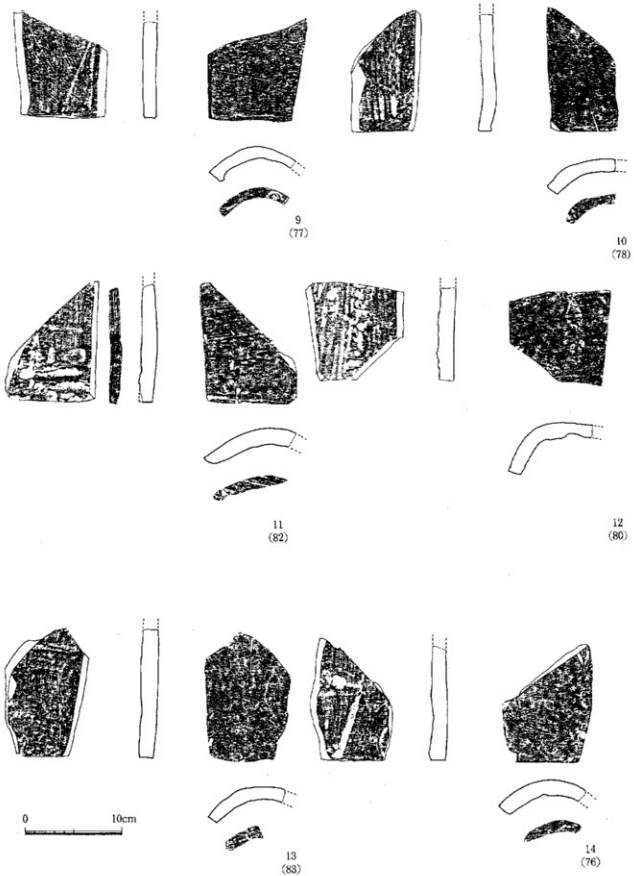


Fig. 43 丸瓦実測図(3) (1 : 4)

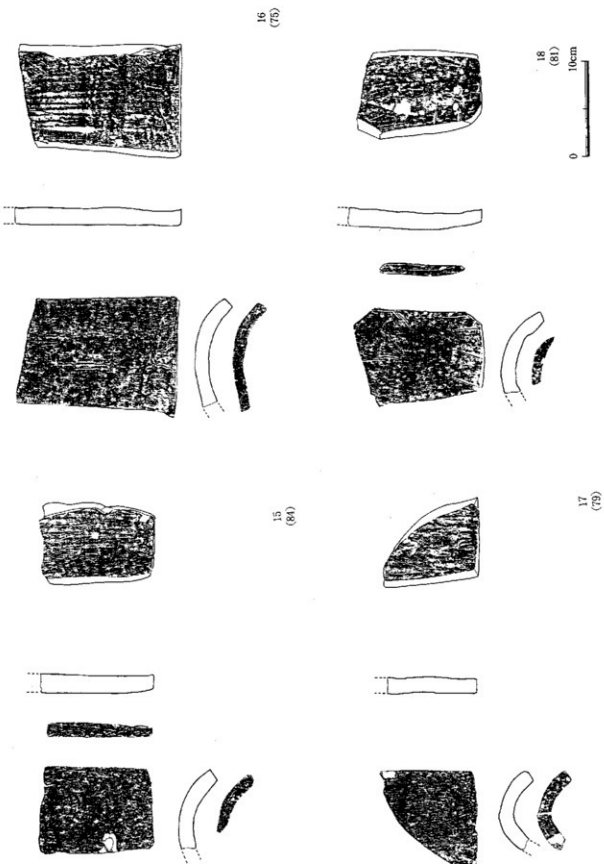


Fig. 44 丸瓦実測図(4) (1 : 4)

知れない。

軒平瓦（Fig. 31） 軒平瓦の可能性があるものは2点出土した。1、2とも瓦当部に二条の沈線を施す。1の凹面は磨滅が著しいが、ナデ消されているようである。凸面は粗い斜格子叩きである。2は凹面の端部を斜めに面取りする。1に比べて厚い。凸面は斜格子叩き、凹面は布目が見られる。

平瓦（Fig. 30～40） 平瓦は叩き原体の違いによって大別している。Fig. 32～34の1～5は比較的目の粗い格子目叩き（0.5～0.8cm程度）を施すものである。完形に復元できるものではなかったが、1から、1枚の大きさはほぼ推定できる。1は長さ41.5cm、上端幅25.5cm、下端幅29.0cmほどであろう。1のように叩きを一部ナデ消す例も見られる。凹面は、布目が基本であるが、1は一部をケズリによって消す。2も同様にケズリを施すが、上端部は横方向のケズリを明瞭に施す。また3は遊瓦に使用された桶状の器具（以下単に桶とする）の痕跡が明瞭にのこる。桶痕は2にも観察される。桶の1単位の幅は、上端3cm、下端4.5cmほどである。1から3、5は暗灰色、4は灰白色を呈する。Fig. 35～37の6～16は比較的目の密な格子目叩き（0.3～0.5cm程度）を施すものである。凹面は布目の痕跡を一部またはほとんど削り消すものが多く、桶の綴じ紐痕と思われる痕跡が見られるもの（10）、端部にも叩きを施すもの（6、15）等が見られる。6～9、12、13は暗灰色で堅緻な焼成、10、11、14～16は灰白色で軟質な焼成である。Fig. 38～40の17～25は斜格子叩きを施すものである。比較的遺存のよい17から見ると上端部25cm、長さ25cm以上、下端部30cm程度に復元されよう。凹面は布目を削り消すものがほとんどである。この中で19は端部に一条の沈線を施し、軒平瓦の可能性もある。しかし、Fig. 31の軒平瓦の沈線と比べると、条数も少なく弱々しい感がある。21の側端部に見える沈線は押圧によるものである。25には桶と綴じ紐の痕跡が見られる。17、18は暗灰色で堅緻な焼成、19～25は灰白色で軟質な焼成である。端部の残るものにはいずれもケズリ痕が見られる。

丸瓦（Fig. 41～44） 丸瓦は凹面に竹状模骨痕が見られ、凸面をケズリ調整するのが基本である。凹面の模骨痕の上になんらかの調整が見られるかどうかで大別した。Fig. 41、42の1～8は竹状模骨痕が明瞭に見られるものである。いずれも布目、模骨痕が明瞭にのこり、2、8以外は模骨の綴じ紐の痕跡も見られる。凸面はケズリの後、粗くなでられる。ケズリの方向は端部付近を横方向、他を縦方向に施すが、4のようにかなり端部から上位まで、横方向のケズリを施すものがある。端部もケズリ調整され、3の側端部に見られる沈線は砂粒の動いた痕跡である。Fig. 43、44には凹面に布目、模骨痕以外の調整が見られるものを掲げた。単に端部のケズリが凹面の周囲にまで及んでいるものも含んでいる。9、10は、布目の上から斜め方向の細かい条線が見られる。12はユビオサエ様の調整により布目の一部を消す。13は布目の上から全体に雑なナデをかける。16も凹面に斜め方向の条線が見られる。1、2にも見られたこの条線はケズリによるものより非常に細く、布目のずれによるものの可能性も考えられる。17は凸面に細かな条線が見られ、ハケメ原体状の工具で割ったものと考えられる。

5．その他の遺構出土土器（Fig. 45）

その他のピットなど出土遺物のうち、遺存がよい主なものを掲げた。住居内施設出土遺物の補遺もここに含めた。1は住居跡7の入口土壙と考えられる土壙130から出土した。直口壺である。頸部は短く、肩が張る。頸部に竹管文を2か所押圧する。遺存部を見るかぎり、この2か所のみのようである。口径8cmを測る。2は同じく土壙130出土の二重口縁壺である。口径25cmを測る。いずれも住居跡7と同時期として矛盾はないと考えられる。3は住居跡20の入口土壙である土壙209から出土した二重口縁壺である。これも住居跡20の時期とは矛盾しない。4は遺構検出作業時に出土した直口壺である。頸部は短くわずかに開く。頸部付け根に突帯を巡らす。後期中頃～後半に属するもので、該期の住居に伴

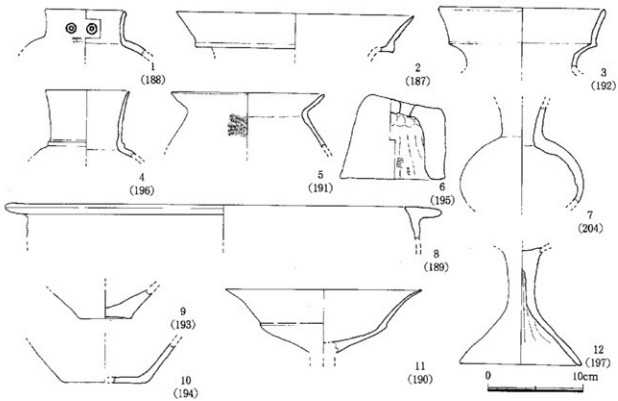


Fig. 45　その他の遺構出土土器実測図（1：4）

うものであろうか。5はピット187出土の布留式系の甕。6は検出時出土の支脚。天井部に穿孔を持つ。弥生時代後期終末～古墳時代初頭のものである。7も検出時出土の須恵器壺。8はピット144出土の弥生土器の甕。9はピット249、10はピット312出土で、いずれも弥生土器の底部である。9は外面にミガキが施され、弥生時代中期後半のものであろう。10は中期末から後期に下がるものと考えられよう。11は古墳時代初頭頃の高坏である。屈曲部から上位は外反しつつ大きく広がる。ピット164出土。ピット164は住居跡4の主柱穴の可能性を考えたピットである。しかしこの土器で時期を決めるのは困難である。12は出土地点不明の高坏脚部である。弥生時代終末頃の在地系高坏であろう。

6．出土石器、鉄器、玉類（Fig. 46、47）

各遺構出土の石器、鉄器、玉類などをまとめて掲げておく。1は灰色を呈する玄武岩製の石斧である。基部から7㎝ほどで折れている。体部は破面も含めかなり磨滅している。住居跡22覆土出土。2は溝25出土の安山岩である。下面と両側面に主剝離面があり、上面には自然面を残す。尖頭器状を呈するが、下面の剝離が大きく、また深く、未製品とは考えにくい。むしろ横長剝片の剝離を目的とした石核で、側面の剝離は打面調整と考えられる。旧石器時代のものと考えられるが、古代溝に混入していた理由は不明である。3は住居跡11出土の小形の砥石である。角柱状を呈し、四面とも砥面としてよく使われている。暗灰色を呈する石材である。4は大型の砥石である。住居跡12出土である。表面、裏面はもちろん、図上上端面を除く各面が砥面として使用されている。とくに側面の砥面には使用痕が細かな条線として観察できる。灰色を呈する石材である。5は住居跡8覆土出土の砥石である。破損した側面の一部を研ぎ直して使用している。暗灰褐色を呈する砂岩系の石材である。Fig. の6～11は石包丁である。6は基部が弧状を呈する。刃部や表面を細かく欠く。小豆色を呈する立岩産と考えられる製品である。住居跡18からの出土である。7は土壙1からの出土である。側辺を面取りして、長方形に

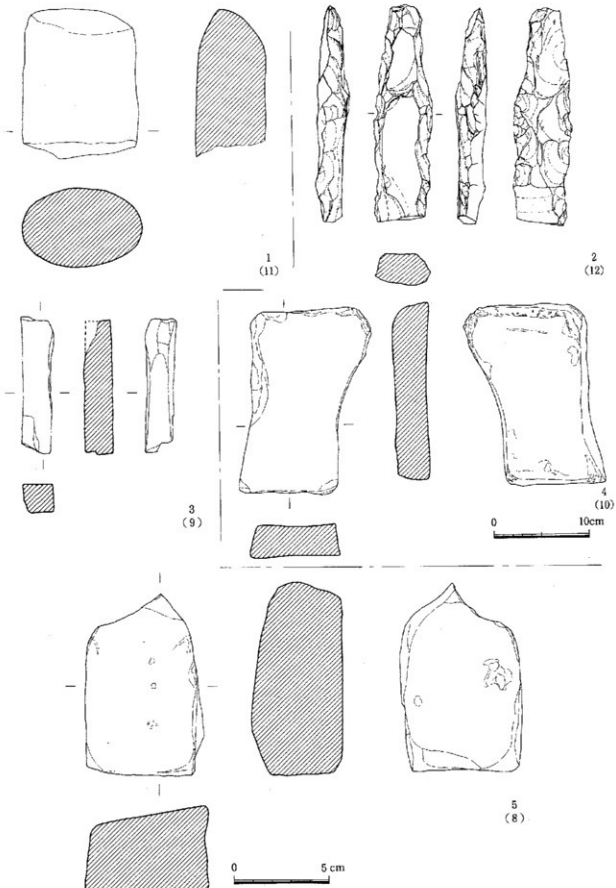


Fig. 46 各遺構出土石器実測図(1) (1：2、1：4)

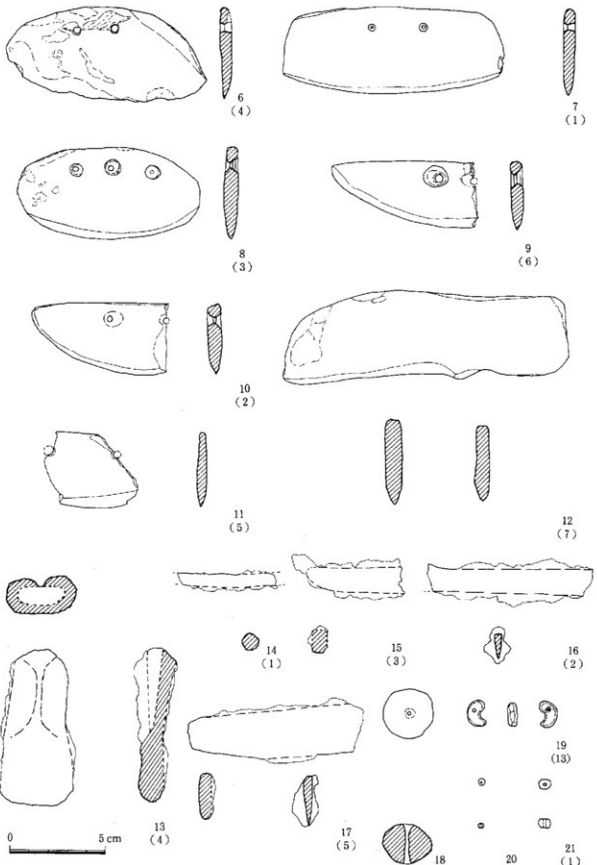


Fig. 47 各遺構出土石器実測図(2)、鉄器、玉類実測図 (1 : 2)

近い形状に作る。小豆色を呈する。立岩産であろう。8は住居跡18出土である。杏仁形を呈する。図上で右端の孔は貫通していない。小豆色を呈する。立岩産であろう。9は遺構検出時の出土品である。かなり細身で、基部は直線を呈する。形状はシャープであるが、穿孔部は大きい。この製品も小豆色を呈する。立岩産であろう。11は石包丁の中央部の破片である。ちょうど2個の孔の部分から割れている。表面はよく研磨されており、刃部も鋭利である。製作時の破損とは考えにくい。この製品は灰色を呈する石材である。住居跡22出土である。12はピット127出土の石鏃である。表面はかなり風化していて灰白色を呈する。刃部の中央やや基部側にある突起は欠損によるものではなく、着柄に関連するものとして、意識的に作り出されたもののようである。基部は細かく欠けているが、ほぼ全長を示していると考えられる。

鉄器はいずれも錆化が著しい。13はピット165出土の鉄斧である。着柄部は折り曲げて袋状に作る。14は住居跡14出土である。断面円形を呈する棒状製品である。両端とも破損しており、本来の長さは不明である。15も棒状を呈する製品である。撹乱壙からの出土であるから、近、現代に属するものの可能性もある。16は刀子と考えられる。住居跡22出土である。17は鉄剣の茎部から刃部にかけての部分と思われる。ピット187出土である。

18は土製品の玉である。平面形は円形、側面形は紡錘形を呈する。中心部に穿孔する。住居跡22出土である。

19は碧玉製の勾玉である。極めて小形である。両面から穿孔している。住居跡22出土である。

20は住居跡18出土である。ガラス製の小玉である。濃紺色を呈する。21も住居跡18出土のガラス小玉である。20よりやや大きい。色調は20とほぼ同様の濃紺色である。

Ⅳ. ま と め

1．住居跡と掘立柱建物についての補足

井尻Ｂ遺跡３次調査では、弥生時代後期の集落、古代の溝をはじめとして、弥生時代中期から古代に至る遺構遺物が検出された。本文で述べたことは繰り返さないが、2、3触れえなかったことを補足しておく（付図参照）。住居跡５としたのは住居跡３、４に切られる孤状の溝状遺構である。円形住居の壁溝の可能性が考えられる。ピット118を中央土壙とすると思われるが、主柱穴の特定ができなかった。掘立柱建物も付図に図示したのは３棟であるが、更に検討が必要である。１号は住居を切っており、方形の柱穴を持つ。溝25と若干方位を異にするが、近いものがあり、瓦葺建物に伴う施設の可能性がある。他の２、３号は弥生時代住居とほぼ方向が同じで、該期のものと考えられる。

2．井尻Ｂ遺跡における瓦の出土

井尻Ｂ遺跡３次調査では溝25をを始めとして瓦が多数出土した。なんらかの瓦葺建物の存在は当然考えざるを得ないが特定される遺構に乏しい。井尻Ｂ遺跡内で瓦が出土することは古くから知られており、言及された文献も多い。これらを紹介しつつ若干の検討を行ないたい。

近世以前の福岡を知るための必須文献の一つである筑前国続風土記拾遺巻之六、井尻村の条には、「村の東南藤崎人家の後に大塚という塚あり。いかなる人を葬りしや詳ならず。また熊野権現の後広畝を開き溝を掘たりしか、百姓惣吉というもの塚の際より鉢の鎔範を掘出たり。石型長三尺斗。上下合せてあり。石質温石の如し。須玖村にある鎔範の類なり。其側より炭屑多く出たり。然れはいにしへ此所にて銅鉾を鋳たりしなるへし。由来詳ならず。此辺土中より古瓦多く出る。むかし大寺など有し址なるへきか。」とあり、熊野権現後の畝に瓦が多く出土することを述べている。また青柳種信の柳園随筆には「剣を鋳たる形の事。今歳寛政九年七月二十五日大宰府天満宮に詣で帰るさ、那珂郡井尻村を過る。爰に此春の頃村の東北方に広き畝有りしを墾て畠とせしが古瓦多く掘出せしと云へり。依て見まく思い寄りたるに、其墾たる地広さ１町ばかり、西北は村に連り、東南は田なり。其畠の中央に小高き岡あり、此廻より瓦多く出しと云う。（此岡自然の岡に有らず、田土を以てわざと築きたる者なり。其土の性畠の地と違よし里民云へり立寄りて見）其瓦の制三宅観音寺などのと同く、面に網目あり裏は布目なり。また其側より石の鋳型を墾出せり。剣の形なり。」とあり、鋳型出土地点付近から瓦が出土していることを述べている。また出土瓦が表が網目で裏が布目という記述は凸面が格子目、凹面が布目という今回出土の瓦と一致する。

大正６年、13年に中山平次郎はこの銅矛鋳型出土地の弥生時代遺構、遺物を求めて井尻を踏査している（中山1924)。これにより、続風土記拾遺の鋳型が出た「塚の際」にあたる地形が無いことから「塚」は「溝」の誤りとしている。また九州鉄道（現西鉄大牟田線）敷設の際の土取りの跡地の観察から、古瓦の包含層と、その下の黒色土包含層及び赤土内の弥生時代遺構を確認している。この時の古瓦の出土状況に関する記述は極めて重要と考えられるので、以下これをもとに検討したい。全文は長文にわたるので要点を列挙して見る。

１．鉄道軌道の両側に広さ１町四方ばかりの鋤取りが行われていた。その場所は井尻駅より福岡寄りである（広場を見た後井尻駅で降車している)。

２．広場は熊野権現の東北方にあたる。(正確な位置は後で検討する。)

３．黒色土の上に灰白色の整地層が乗る部分が有り、この層に限って瓦を包含する。またこの層が乗る部分はそれだけ回りより高くなっている。

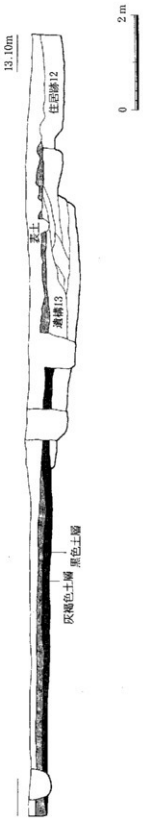


Fig. 48　調査区北壁土層図（1：80）

まず基本になるのは続風土記拾遺、柳園随筆共に古瓦の散布地とする熊野権現後の広畝である。この熊野権現は現在地禄神社に合祀されているが、1913年以前は現在の井尻公民館の位置にあったことが吉留秀敏氏の聞き取り調査によって確認されている（福岡市教委1988）。その位置をFig. 2、3に示した。Fig. 3ではその東北方には確かに畝が認められる。以下この図を用いて検討する。つぎに中山が包含層を確認した土取りの跡の「新広場」の位置であるが、熊野権現から「小路を東方に向かって進むとちょうど新開広場の一端に出る」と記されているので、熊野権現の東から線路に向かって伸びる道を辿ったのであろう。すると、線路の手前で荒れ地記号で示された100m四方ほどの土地に出る。これが中山の云う「1町四方許り」の新広場であろう。中山はこの周囲に土取りにより土層断面が露出しており、「広場北側の殆ど全幅並に東側の一半には表層たる黒色土層の上に、更に一層の厚さ1尺内外一部に於ては2尺に達する灰白色土層」があり、「この部においては地面がそれだけ高くなって」いた。この土層は柳園随筆にいう「自然の岡に非ず。田土を以てわさと築きたる者」に一致し、「埋没している瓦片はこの特殊の灰白色土層に限って存する」ことから寺院の基壇であると指摘している。吉留氏はこの高まりが拾遺にいう「塚の際」の塚で、溝の誤りではないとするが、筆者もその可能性が高いと思う。ではこの高まりは基壇であろうか。結論からいえばこの高まりをなす「灰白色」の古瓦包含層は基壇そのものではないと考えられる。この層に相当すると考えられる層は調査区でも検出されており、Fig. 48に図示したとおりである。瓦を包含する灰褐色土層は10～20cmの厚さで堆積しており、中山が見た1～2尺と比べるとかなり削平されているが、瓦の包含状況、中山の述べる土質の説明から見て、ほぼ同一層の一部に間違いないと考えられる。そうだとすると、この層からは多数の瓦が出土してはいるが、層中に雑然と包含された状態であり、瓦積基壇状を呈するようなものではない。従って調査区内で見るかぎり、この層は瓦葺建物創建時の整地ではなく、廃絶後の整地である。この地が整地の後どのような用途に用いられたか不明であるが、調査地点では瓦葺建物廃絶後すぐ竪穴式住居が作られたと考えられ、また、現在までの調査成果からも井尻で出土する瓦にはほとんど時期差が認めがたい

ことからも、瓦包含層形成後、程無く別の寺院が建立されたというようなことは考えにくい。また福岡県地名辞典によっても、中世末期まで井尻の地名は文献には見えず、寺院の存在も認められないようである。(蛇足ながら付記しておくと、中山はこの層が寺院建立のための造成であると指摘した後に続けて、続風土記にこの村に院使寺という寺が有り、井尻の地名の由来となったという記事を引いて、この寺の跡であろうと述べている。これも中山の誤解である。院使寺とは和銅2年に背振山に居た湛誉という僧が元明帝の勅使を迎えたことに由来するという寺名であるが、続風土記の院使寺の条に「別所村の枝村也。」とあるように今の那珂川町に属する地にあった地名である。)

さて以上の検討から市街化される以前の近代、近世においても瓦葺建物の性格を示す遺構は確認できないことが明らかになってしまった。従って以下ではかなりの推測も混えながらまとめを行なっておく。まず瓦葺建物の存続時期は出土瓦から見て、極めて短いものと考えられる。単弁の軒丸瓦、稚拙な重弧文の軒平瓦、模骨痕の残る丸瓦などの特徴から7世紀後半から8世紀前半に位置しよう。該期に瓦が葺かれる建物としては宮殿、官衙、寺院以外には考えにくい。大宰府に関連する官衙の可能性もあるのかも知れないが、やはり寺院の可能性が高いのではなかろうか。この寺院を仮に井尻廃寺とよぶことにする。次にその寺域の範囲であるが、今まで見た諸記録では「熊野権現後の広蔵」以外に古瓦の出土に触れたものは無く、ほぼこの中に限定されよう。そのなかでも中山のいう「新広場」の西側、南側には包含層は見られず、北側には全幅にわたって見られるということであり、散布地の中心が「新広場」の北側へ広がることが知られる。これらのことと今回調査で遺構が希薄になることなどから仮に方1町で大胆に復元を試みると、Fig. 49のようになる。井尻廃寺は廃絶後人為的に整地されたと考えられ、また推定地周辺は市街化が完了している。今後全容の究明には悲観的にならざるを得ないが、地道に努力したいと思う。

(文献) 中山平次郎 1924「井尻の弥生式遺跡」考古学雑誌14-12 福岡市教育委員会 1988「井尻B遺跡」福岡市教育委員会埋蔵文化財報告書175集

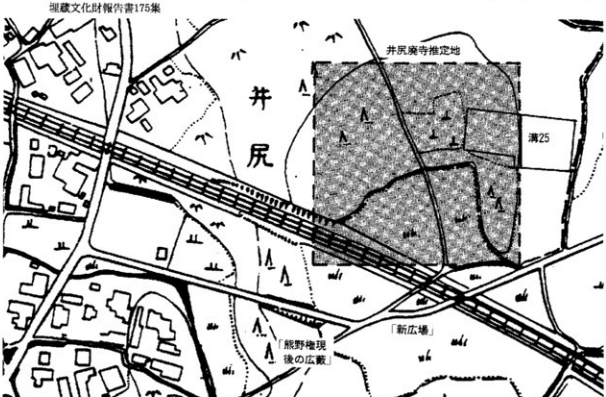
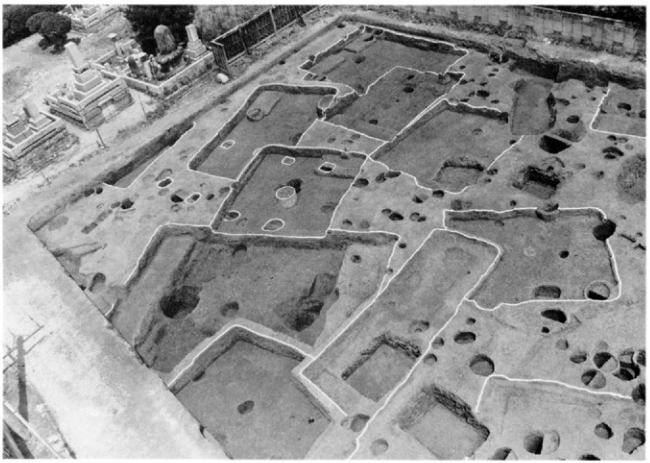


Fig. 49 井尻廃寺の推定寺域

図　版

(1) 調査区全景（西半区） 東から

(2) 調査区全景（東半区） 西から



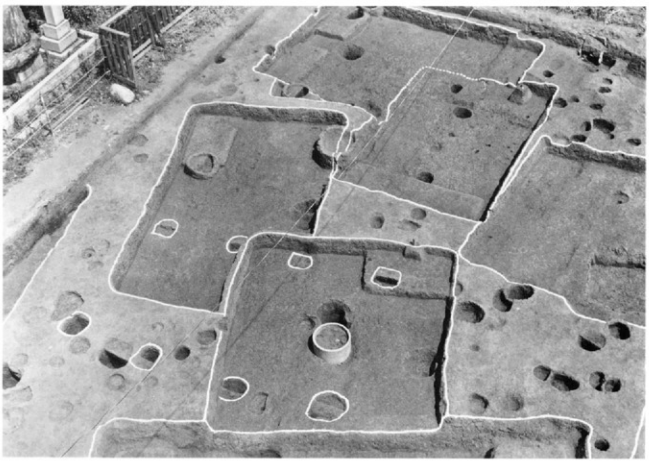
(1) 住居跡群 (南から)

(2) 住居跡4 (東から)

(1) 住居跡7 (東から)

(2) 住居跡12 (南から)

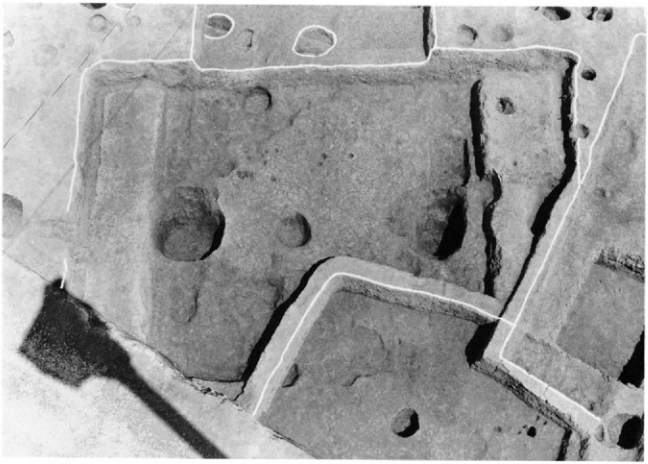
(1) 住居跡14 (東から)



(2) 住居跡11・12、1号掘立柱建物 (南から)

(1) 住居跡20 (南から)

(2) 住居跡20 遺物出土状況



(1) 住居跡22 (南から)

(2) 住居跡17・26 (南から)

(1) 住居跡26 遺物出土状況

(2) 住居跡29 (北から)

(1) 住居跡36 (南から)

(2) 住居跡8 (東から)

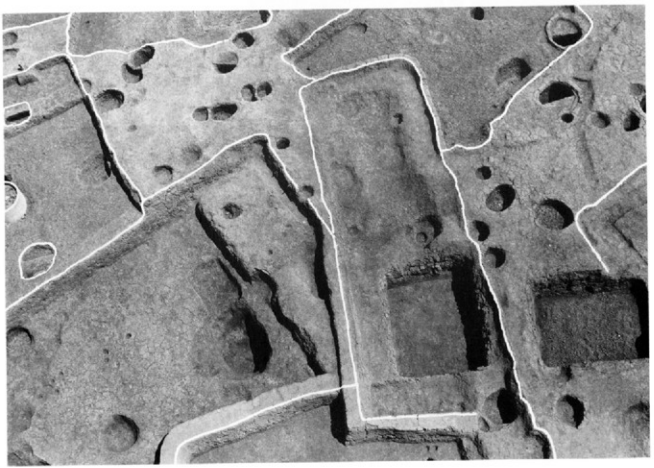
(1) 住居跡2 (北から)

(2) 住居跡2 瓦組遺構 (北から)

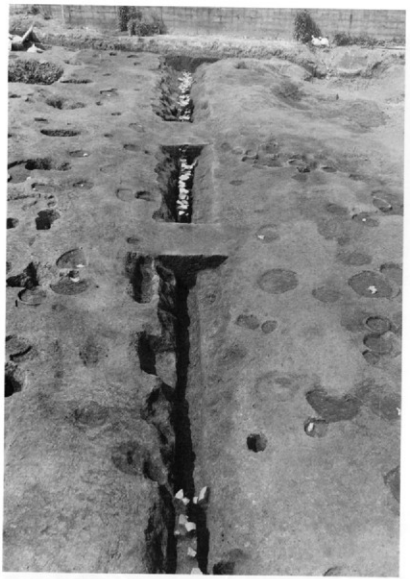
(1) 井戸40 (西から)

(2) 井戸41 (西から)

(1) 井戸33 (西から)

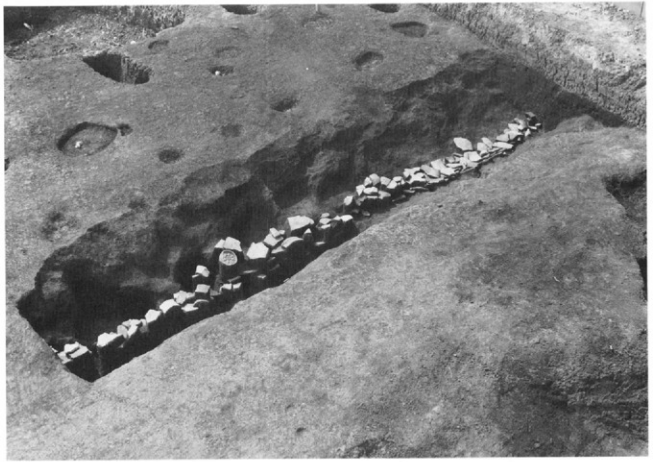


(2) 土壙6 (南から)



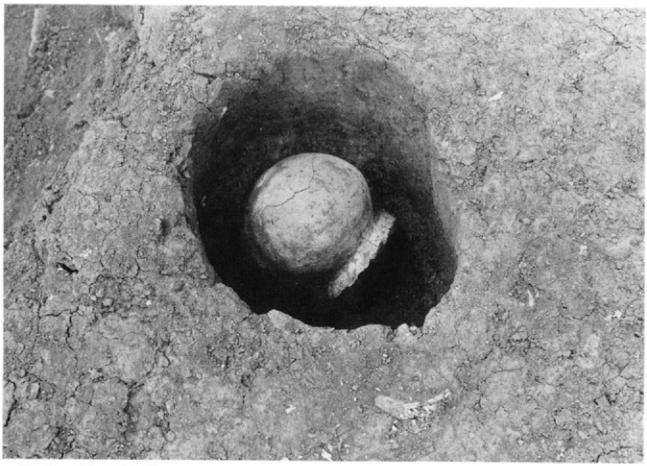
(1) 溝25 (南から)

(2) 溝25 遺物出土状況 (東から)

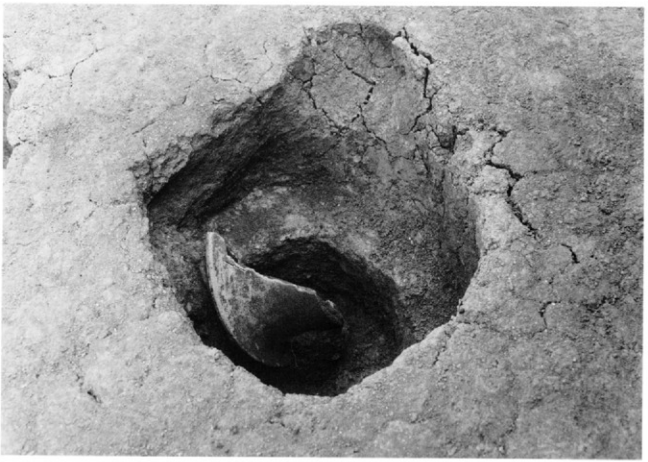


(1) 溝25 遺物出土状況 (東から)

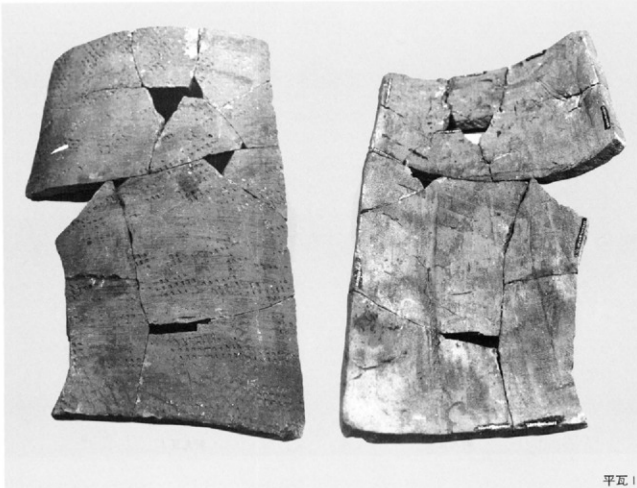
(2) 2号掘立柱建物 (西から)



(1) ピット27 (東から)



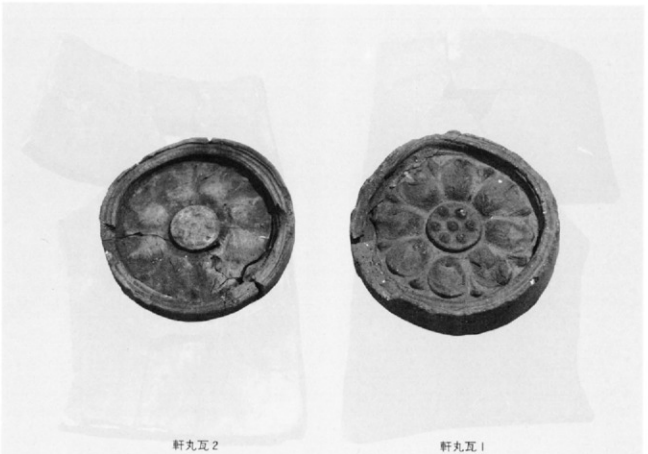
(2) ピット118 (南から)



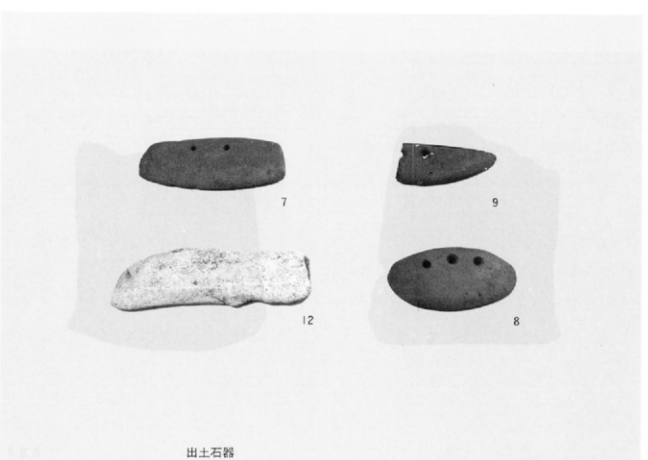
平瓦 1

丸瓦 4

出土遺物 (1)



軒丸瓦 2　　軒丸瓦 1



出土石器

出土遺物 (2)

井尻B遺跡2

—第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第411集

1995年3月31日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1－8－1

印　刷　株式会社　川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号